

---

# 黒の少女と観戦日記

暁 すう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒の少女と観戦日記

### 【Nコード】

N8492X

### 【作者名】

暁 すう

### 【あらすじ】

将来の夢はない。恋もしていないし、なんの委員会にも入っていない。取り柄といえば、足が速いことぐらい。そんな無気力女子高生が、とあるきっかけで見知らぬ世界へ飛ばされて。訳もわからず混乱する七夕は、元の世界へと帰る方法を探し始める。しかし、その世界で起こっている戦争を見て・・・

## 00 プロローグ

巷でいうところのJKになって、一年が過ぎた。

心地良い陽気っちゃあ心地よい陽気ではあるのだが、何分風が強くていちいち私に召されようとしてくる髪がうざったい。

二年になって数日が経過して、私は大分クラスになじみ始めてきた。新しい友達もできたし、先生はノリが良い人で、今年はいろいろと安心できそうだ。

クラスでつまらない思いをするのは、嫌だしね。

部活は充実している。

私は陸上部なのだが、去年の秋に、短距離のレギュラーに入ることができた。後輩は可愛い。もうめっちゃ可愛い。毎日撫ですぎてうざがられてるけど撫でるのをやめたら私の先輩らしさが見当たらないくらいそうだからやめない。残念だったね、カミナちゃん。

言い過ぎかもしれないけど、順風満帆…って感じた。

私のイメージでは、中学と高校は二年が一番楽しいと勝手に思っている。

だから、今年は最高の一年になる！きつと！

…まあ根拠のない思い込みはいい方向に働くだらうと決めつけてやる。

「まつぴんくやなあー。」

地面でくつるくる回ってるピンクの花弁を見ながら呟く。足元のさくらちゃんたちは大半がリストラされたリーマンのように元気をなくしてアスファルトに寝そべっていた。

会社の方を見上げてみると、有能な黄緑がオフィスを占領している。残り少ない桃色は現在進行形で追いやられてふらふらと虚空を彷徨っていた。

儂いなあ、と思う。

生まれ変わっても、桜にはなりたくない。そもそも私はピンクという色があんまり好きじゃない。

平和すぎる、色って感じがして。

私は常に、何かに恐怖を感じて生きているから。

油断を誘うその色は　　やっぱり好きになれなかった。

んー…、自己紹介とか…した方が良いよね、やっぱり。

なんか一人で自分のことをひたすら話すって、気恥ずかしいけど。でも、花子とか呼ばれたら嫌だし。

名前は、弓塚七夕なゆづ。由来は多分わかると思うけど、誕生日が七夕だから。『たなばた』って名前にされなくて良かったーって素直に喜べないところに両親の才能を感じるね。なんだよ、なゆづって。

上に兄がいて、四人家族。

特技っていうか、趣味は走ることかな。

兄貴には男みたいだとよく言われるし、お母さんには口が悪いと怒られる。それだけで私の性格はわかるというものだろう。

まあ、そんならい。特別目立ったところはない。

幽霊とは話せないし、超能力もつかえない。ふっつーの。高校二年生女子。彼氏は中三の時以来いない。

まああれは血迷った結果だけ。

特別なことにあこがれを持つ時期は通り過ぎた。

普通が一番。今なら分かる。

将来の夢も持っていないつまらん奴だけど、それでいいなあと思ってる。

それに、私は一生特別な体験をすることはないだろうし。

…と、まあそう思ってたんだよ。この時までだよ。

01 日常

4月13日

「なゆー。」

昼休み、私に話しかけてきたのは、友達の吹上れらだった。こいつも私に負けず劣らず変な名前。ちなみに結構可愛い。ちっちゃくて。

「何？」

購買で買ってきたチュロスをかじりながら答える。

「昨日さあ、めっちゃ可愛いレギンス売っててえ。欲しいの二足あったんだけど…金なくてさあ。ピンクと黒ですっごい迷ったんだよね。」

「どっちにしたの？」迷いなく黒だろ。

「ピンク。」

「乙女だなあ。」

そりゃ、れらだったら似合うだろうさ。

「れらねー、黒なゆにあげようと思ったんだけどー。」

「金なかったんだろ？今聞いたよ。」

「あははー。それもあるんだけどねー。」

そっぴいえばなゆってスカートとかあんま履かないなー、と思って。やめたんだよね、と微笑むれら。

微笑むれらって新らしい語尾みたいだな。

「履いてんじゃん。」

現在進行形で。

「制服じゃん！違くて、私服で！」

「あー…。」

スカート…持ってたっけ？兄貴にきもいって言われてから履いてない気がするなあ。今思い出してもムカつく奴だよな、兄貴って。

スカートは、走る時にめくれるし、落ち着かない。私が帰りの電車に駆け込みしてる時にどんだけハゲおやじを敵に回していることがジャージなめんな。

「その下ジャーもどうかと思うよ？」

「何で。」

「女の子らしくない。」

「よく言われる。」

「もったいない。」

「それは言われないなあ。」

下ジャーあったかいんだけどねえ。落ち着くし。

むう、と膨れるれらは可愛いとは思っけど私の心を痛ませるにはまだ足りない。

れらは、可愛い顔してるくせにご飯を食べるのがめっちゃ早かったりする。

だから既に、くっつけている机の上になららの弁当箱は置かれていない。私も体育会系なので早い方なのだが、れらはそれ以上。まあれらも一応運動部だけど。

なんだっけ？バレー部？背えちっちゃいのにえらいね。

「れらー、保健委員特別会議だつてさー。」

教室の後ろのドアから、にゅっと背の高い少女が入って来た。

「お、なゆ良いの食べてんじゃん。一口ちよーだい。」

隣のクラスの山田巡。モデルばりの美少女である。性格もさっぱり

していて、同じクラスにはなったことないけど気が合う。同じ陸上部っていうのもあるか。巡は長距離だからあんま接触はないけど。

巡は私のチョコスを、一口で全て食べた。半分くらい残ってたのに。

「一口に気を遣わない奴はがめつい奴だと相場は決まっている。」

「うま。あたしもチョコス買って来よう。」

「私に一本。」

「覚えてたらね。」

「おめえ買ってくる気ねえだろ。」

あははと、憎たらしい笑みを浮かべる巡。れらを見習え。こいつはこんなにも可愛いぞ。わしゃわしゃ。

「わぁお。なゆに撫でられたぁ。」

「んじゃ、いつてらっしやいな。」

「はあい！」

元気なお返事よく出来ました。

「私には？」

「じゃあね。」

「地味に傷つく。」

巡は苦笑してから「分かったよ、チョコスね」と言っつて、れらを連れて出て行った。

はぁ…私のチョコス…。

「せんぱーいー！」

「不合格。」

「何がっすか。」

「せんぱーい（ ）じゃなくて、せんぱーい（ ）の方が良い。」

「なんか気持ち悪いですよ。」

「よっ言われる。」



放課後の部活。小走りで駆け寄ってきたちっさい上南<sup>カミナ</sup>を正面から抱きしめてうざがられる。いつものことです。いやあ、しかし可愛いなあ。こいつにせんぱーい（）なんて呼ばれたら返事しちゃうよ。

「何、どうした。」

「いや、今日のメニューを…ちょ、撫でないで下さいー!」

「お前シャンプー何使ってるの。」

香り過ぎじゃね？

「いや…ちょ、なゆ先輩、うざいっす。」

「知ってるっす。」

「はい、メニューです。」

カミナが私の手を払いながら今日の練習内容が書かれたルーズリーフを渡してくる。いやあ可愛いなあ。ひよつとしたらハムスターよりも可愛いぞ。ハムスターとか実物見たことないけど。

ジャージの裾を直しながら、カミナはむすつとして「早く練習はじめますよ!」とかごろ寝している猫のくしゃみ並の可愛さを発揮してきた。可愛いわあ。陸部入って良かったわあ。れらとは違う可愛さがあるね。まあジャンルが違うから比べたりはできないけど。

んで、部活動をいつものように終えて、途中まで友達と普通に帰宅を果たした。

「ただいまー。」

「おかえりー。」

兄貴が玄関に座ってた。

「…何してんの。」

「気分。」

…変な人。

そういえば巡、チョコロス持ってこなかったな…あの野郎。

「兄貴、何やってんの。」

「何も。」

後ろをむいて、背を丸める兄貴の手元を覗きこむ。

「…工口本は玄関で読むもんじゃねえぞ？」

「ちげえよ！」

「…ねこ？」

よく見ると、兄貴の腕の中には茶色いぶちのネコが抱かれていた。

「こねこじゃん。拾ったん？」

兄貴はバレター！みたいな顔で答えない。笑うけど馬鹿にしないって。

「…庭にいた。」

「ふうん？」

可愛いなあ。こねことか。カミナと同じくらい可愛いじゃん。てか隠さなくてもいいのに。

しかし、あの兄貴が猫とかうける。

「だから見せたくなかったのに。」

私が声押し殺し殺しながら笑いまくる姿を悔しそうに見つめる兄貴がなんだか可愛らしく見えた。

さて、トイレ。

先程から密かに催していた。

私は学校のトイレが死ぬほど嫌いだから、家に帰るまでトイレには行かない。

学校のトイレだけじゃなくて、家のトイレ以外は全部無理。

潔癖症とか、そういうんじゃないんだけど…。まあこの話は少し下

品なので置いとっつ。

トイレは、使用中だった。

「……。」

小さく舌打ちして、

「誰系？」

と呼びかける。

「お母さん系ー！ごめんね、出るわ。」

また雑誌読んでたろ、こいつ。自室にすんなよ。

扉が重々しい音をたてる。

私は少し避けてお母さんが出てくるのを待つ。

「相変わらずたてつけ悪いわねー。」

お母さんはそう言いながら、雑誌を片手に出てきた。

「直さないとね。」

私は言っつて、入れ替わりに狭い空間に閉じ込められに行った。

閉じにくい扉を閉じて、鍵をかけようとした瞬間。

……は？

バツキィ…！…いつてもうた。

ドアノブが、ポツキリ折れて、役目をなし終えた。

私を残して。

おい。おいおい。待てや。

え？出れなくね？これ。

捻んないと出れないんだよ？ウチのトイレ。

ぶ…無様だ。

「ちょお、ちょお誰か！」  
…返事はない。

え、何で？

壁に耳を当ててみると、

『わっわっ！母ちゃんヤバイ！漏らした漏らした！』

『あらあら…雑巾雑巾…』

こ…この野郎…ねこちゃんめ…！

ひとまず騒動が収まるまで待っていていようかと、溜息をついた瞬間。

トイレの水が流れた。

いや、水洗トイレだから水は流れるんだけど…このウチのトイレの  
水洗は手動で…。

私はその働きになんの助力もしていない。  
気持ち悪！

とか、思っていたら。

いきなり風が吹いてきて…。え、風？  
てゆうか…。

え、どこ此処？

## 02 非日常のスタートダッシュ（前書き）

残酷表現あります。苦手な方は注意してください。

## 02 非日常のスタートダッシュ

そこは、見覚えのない更地だった。

当然、じゃあとりあえずランニングから始めるかーとか思う筈もな  
く。

どこだよ、ここは…。

言っておくが、私がいたのはトイレだ。家の。

しかしここは明らかに室内じゃない。つーか私靴下なんだけども、  
汚れてしまうではないか。

「こういう時はカミナちゃんにちよっかい出したいね。」  
そうすると落ち着くんだよ。

カミナは高校に入って初めてできた後輩だから、特に可愛い。いや、  
部員が一人しかいないとかじゃなくて。カミナは陸上の半推薦で入  
ったようなものだから、他の子と違って春休みにはもう部活に参加  
してた。

そんなことを考えながらぼーっとしていた。

何が出来る訳でもないし。突っ立ってるほかない。と、何となくナ  
メケモノに憧れを抱き始めながらどうでもいい言い訳を心内環境に  
挿入する。

そこに。

「いたぞー！【一角獣<sup>ユニコーン</sup>】だ！」

声が聞こえた。

振り返ると、そこには五つの人影。  
暗くて姿はうつすらとしか見えないが、うち二つは大きさからして子供だろうか。

それぞれ何か長い棒のようなものを抱えている大人（？）三人と、子供二人は数歩距離を置いて対峙しているようだ。  
なんだろう、と目を凝らして見てみる。

30メートルは離れている5人を、しまうまの群れを観察するライオンのように見据える。  
争っているように見える。

そんな風に思っていたら。

大人…体格からして男だろうか。男が、一人ずつと前にでて、二人に近付いた。

そして、手にしていた棒を掲げる。

そこで気付く。

（刃…?!）

棒の先端には薄明かりに鈍い光を放つ刃が存在感を自慢していた。

そしてそのままそれを

振り下ろす。

「っ!?!」

「きゃあああああああ!」

な…!?!?

何が、

何が、何が、

何が、

何が、

何が、

何が、起きてるの…？今

子供の一人が、糸が切れたマリオネットのように。

意図が切れたマリオネットのように。

頭を垂れる。それから、もう一人に支えられて、なんとか重力に逆らう。

しかし、あれはもう死んでる。それは私でも分かる。

「ま…ってよ…！」

嘘でしょ。意味わかんない。私はそこまで、状況把握が上手くない…！

男が、引き抜いた槍の切っ先を、もう一人に向けた。

駄目だ。

あの子を殺しては駄目だ。

そう思った瞬間、私の足は自然と動いていた。

私の唯一の取り柄。足の速さ。



間に合え…！そう祈りながら、思い切り地面を蹴った。  
振り下ろされる槍を目で追って。

すぐ後に、ずぶつ、という嫌な音がした。

「？」

私は男たちから数十メートル離れた位置で、子供二人を抱えて身を低くしていた。

地面に深々と。沈むように刺さっている槍を見て、背筋に何かが走った気がした。

私は、一秒で50メートルを走りきる様な奴じゃあ…なかったんだけど。

靴下のままで、ここまで走れるとは思わなかった。

というか明らかに異常だ。

まあ、今は都合がいい。

「お…ねえちゃ…」

腕の中の女の子は、泣きながら私を見上げていた。

死んでしまった女の子は、すごく軽くて。ニンギョウみたいで。

でも、すごく重かった。抱えてるのが、精一杯なくらいに。

今まで地面に刺さった槍を呆然と見つめていた男たちは、女の子の声で一斉にこちらをみた。

「…まじ…信じらんねえなあ…！逃げたらほっぺつねんないと…っ！」

私は小さくそう言って、男たちとは逆方向に、二人を抱えたまま走りだした。

### 03 蒼の少女

走って。

何キロも走ってきた気がする。

さっきまで追って来ていた男たちももういない。

子供とはいえ、霊長目ヒト科…正式な名前は忘れたけど人間を抱えているのだ。しかも二人。

しかし。

何故だが、まだまだ走れる気さえする。

いや…かなり疲れている上に、息も乱れているんだけど。

足は軽い。不思議。

まあしかし追手もないのに走ってもしょうがない。

私は立ち止まって、周りを見回した。

いつの間にか日が出始めていて、空を見上げるとつつすらと空に文字っぽいものや数字が浮かんでいた。

なんだこれ…。なんだここ…。

今更な疑問がぼつぼつと浮いてくる。

視線を自分の体の周りに一周させる。付き添いで首と上半身も同行。周りはさっきの更地とは違って、草花や木が茂っている場所だった。綺麗な空気に不足はなさそうだ。

周りの安全を確かめて、私は木陰に二人をおろした。そして傍に座

る。

疲れていたのか、眠っていたらしい少女は、すぐに目を覚ました。

芯を入れた後に勢いよく元に戻るホツチキスのように上体を起こす少女に、声をかける。

「た…ぶん、もう大丈夫じゃないかな。まあ…」

私は少女の頭を撫でて。

「本当は大丈夫なんて、言えないけど…ね。」

永遠の眠りについた少女を見下ろす。胸が痛い。二人とも、7・8才くらいの幼い女の子だ。

「…ありがとう、お姉ちゃん。」

少女は、姉妹か友達かは知らないけれど、静かに眠る女の子を見ながらそつと言った。

うーん…。

「あのさ、名前…聴いて良いかな。」

呼ぶときに困るからね。

「あ…。うん。ソラリス…です。」

明るい場所で見ると、すごく可愛い子だ。髪と同じ蒼い瞳が、光を受け止めて、増幅させながら放出しているようだった。

「ソラリス…ふうん。で、この子は？」

私は同じく蒼い髪の眠り姫を撫でる。首から広がっていた赤は、もう外出を止めている。可愛い子だ。

「く…！クルネル…！」

ソラリスは、身を乗り出すように言った。

「友達…！ともだち…、うう…クルネルう…。」

ソラリスは、瞳から透き通った涙で頬に軌跡を作り始める。

そうか、友達か。辛いなあ。

私はソラリスの頭をぼふぼふと撫でて、ソラリスが泣きやむのを

待った。

しばらくして顔をあげたソラリスに罪悪感を少し芽吹かせながらも、訊いてみた。

「さっきの人たちは…何かな？」

ソラリスは、美しい瞳で私を見て、俯いた。

「多分：【フォックス紅い狐】の人…だと思います。」

自信なさそうに、ソラリスは言った。

フォックス  
「紅い狐…？」

私が首を傾げると、ソラリスは目を見開いた。ああ、常識なのね。でも仕方ないじゃない。ここがどこかも分からないのよー、私は。

「知らないんですか？」

そういえば…お姉ちゃんはこの所属なんですか？」

ソラリスは眉をひそめて、わずかに警戒の色を見せる。うわああ。

「所属？」

陸上部だけ…それは違うよね、勿論。

「あ…お姉ちゃんどこから…」

ソラリスが私の故郷は何処かと訪ねて来たところに。

「ソラリス！」

走って来たのは、結構なイケメン二人組だった。ソラリスよりも少し深めの蒼色の短髪の青年と、金髪に蒼い瞳を持

った渋い男性。男性の方は、茶色い馬にまたがっている。  
青年はソラリスに転げるように駆け寄って、小さな矮躯をチカラい  
っぱい抱きしめた。

「ジャック…！」

ソラリスは嬉しそうにジャックなる青年を抱き返す。ソラリスの知  
り合いのようだとりあえず一安心。  
自分でもわかっていない現状を説明する人が増えちゃったけど。ま  
あいつか。

今気づいたけど、靴下きたなっ。

## 04 兄妹と

予想はしていたけれど。

青年ジャックと、男性ヴァシユカには、盛大に怪しまれた。まあ私はいきなり現れた不審人物だしね。

知っているはずのことを知らなくて、所属とやらもしてなくて。クルネルを抱いていたせいで制服は血だらけで。そのクルネルは…命を絶つていて。

怪しむな、という方が無理だろうな。自分でもそう思うよ。靴下だし。

私はソラリスの協力を得て、今の現状を私の分かる範囲でジャックとヴァシユカに伝えた。

ジャックとヴァシユカは真面目に聴いてくれて、ソラリスは目をキラキラ輝かせて聴いていた。不思議な体験をした私の話しが聴けるのが楽しいらしい。

私が別の世界から来たという話を聞いた二人は眉を思い切りひそめ（私も同じ気持ちなんだから変人を見る目で見ないで下さい）、ソラリスとクルネルが襲われていたところを目撃したところを話すと、二人は悲しそうに目を細めた。語っているこっちが苦しくなる。

私のつたない説明で、今までのことを語りきると、ジャックがいきなり跪いて手を取ってきた。うい？！

「本当にありがとう。ソラリスと、クルネルを助けてくれて。」

目を強く閉じて、ジャックはそう言ってきた。

「く…クルネルは…助けてあげられなかった…。」

私はずきりと痛む何かから目を逸らすように、俯いた。そんな私に、ジャックは静かに首を横に振る。

「いや。助けてくれたよ。クルネルは、ここにいる。ソラリスと一緒に、帰って来てくれた。」

ジャックはそつと微笑んだ。儂い笑みを浮かべる美青年に、思わず見とれてしまいそうだった。

「少し信じがたいが、別世界から来たのなら…きみのこともいるいと納得がいく。」

ジャックは私の話を信じてくれたらしい。へえ、すごいな。

それから、何かと分からないことも多いだろうから、この世界のことを教えてあげるよ。と言われた。

優しいね。

「じゃ、ここじゃあれだし…一緒に行こうか。ええと…」

「ああ、私は七夕…みんななゆって呼ぶから。なゆで良いよ。」

「そうか。じゃあナユ。とりあえず僕らの家にしばらくいると良いよ。」

ジャックが微笑んで言った。

え？私しばらくいるの前提？

「そうだよ、おねえちゃん！ウチにきなよ！ずっといても良いよ！ソラリスもにつこり笑って言う。このそろって強引な感じは…。」

「“僕らの”って…兄妹…？」

私の問いに、二人は同時に頷いた。ふうん。美男美女だなあ。

いや、それは関係ないか。

私は汚れた靴下を脱ぎ捨て、そして立ち上がった。体力も大分回復したしねえ。

クルネルをそつと、大事に抱きかかえて「よろしく。」頭を下げた。

もう少しで、帰れるからね。私はクルネルに心の中でささやいた。

それじゃあ、この世界の話をいろいろ知るために、お世話になりに行きますか。



ソラリスとジャックは、別ルートで帰るそうなので、私と馬はそこを通って行くことができないらしい。

なので、私はヴァシユカと一緒に馬に乗って連れていってもらおうと思った。

「ごめんね、わざわざ。遠回りなんでしょ?」

私は、クルネルを揺らさないようにそっと抱えて馬に跨りながら、ヴァシユカにお礼を言った。ヴァシユカは小さく笑って、首を横に振る。

「だから、こいつもあの道は通れないんだ。俺がついてなければ。」  
ぽんぽんと馬の背を叩きながらヴァシユカは微笑む。

「あ、そっか。」

しかしやっぱり、ヴァシユカもかっこいいなあ。笑うと大人の色気みたいなを感じる。

ヴァシユカはもう一度優しく笑って、私を気遣いながら馬に跨った。

ヴァシユカは私に気遣ってくれているのか、馬のスピードをゆるやかにしてくれている。

馬、馬って言うてるけども、この馬名前はないのか?

と、思ったので聞いてみた。

「ああ、こいつはロツティだ。」

ヴァシユカは、馬のたてがみをなでながら答える。ずいぶん可愛らしい名前だね。

上あごと下あごを別々に動かして「あん? ナニ見てんだてめー。やんのかこら。ちんちくりんのくせにご主人を誘惑しやがってヒビ-

ン」とか言ってるように、横目でにらんでくる。あれ、馬ってこんなだったっけ？

ジャックとソラリスの家に着くまでに、ヴァシユカがこの世界のことを少し教えてくれた。

分かったことは。

ここはジェルズドリアという名の世界で（世界に名前があるってどういうこと？）、5つの国で出来ている。

通称青の国と呼ばれているセノルーン。

同じく緑の国と呼ばれているラツシュバルド。

そして赤の国と呼ばれるフレイムルアー。

さらに、銀の国と呼ばれるログダリア。

最後に、この世界の中心に位置する、白の国と呼ばれるライトフェザー。

「ああ…みどり…あか…ぎん…しろ。」

「ああ。俺達はセノルーン公国の者だ。」

「…そんな気がしてた。…ヴァシユカの目とか…ジャックとソラリスの髪とかも、関係あるんだよね？」

私の説明に、頷くヴァシユカ。

「そうだな。そういう場合が多い。」

多いということは、必ずしもという訳ではないということか。

「まあ、国内での結婚だけではないからな。たとえば赤と青の子供は、そのどちらかの色を引き継ぐか…紺や紫になることもある。」

うわ、絵の具みたい。

色を混ぜて新しい色を作るみたいな。

「ああ、でも…。白の国は少し違うんだ。」

ヴァシユカの言葉に、疑問を返す。何が？

「白の国の者は殆どが同族同士の婚約なんだ。まあ、例外がないわけではないが…。白の国の者は、天使だからな。天使は天使同士で結ばれるのが当たり前なんだ。」

「てんしい?!」  
なんてメルヘンな。

死人を天国に運んだりする全裸の羽つけた子供みたいなやつなのか？  
「馬鹿を言っな。そんな優しいものじゃない。子供というのはあっているが…。天使は俺達を殺しに来る、生きた殺戮兵器だぞ。」

「はあ!?何それ!」  
殺戮兵器?“天使”が?

「まあその説明はおいおいして行こう。」  
ヴァシユカは難しそうな顔をこちらに向けて、そう言った。

一般常識であることを教えるのは疲れそうだ。  
私だってテレビの仕組みや電車の使い方と教えると言われたら面倒だと思っだろう。

そもそもテレビの仕組みなんかは私だってよく分からないし。  
そういうことを考えると、ヴァシユカもジャックも、もちろんソラリスも。

得体のしれない私にいろいろ教えてくれて。  
それだけでもう、信頼できるというものだ。

ヴァシユカとの会話が切れたところで、街が見えてきた。

そこそこ大きい街で、人々がにぎわっている。  
ヴァシユカは一度ロツティを止まらせて、羽織っていたマントを渡してきた。

「すまないが、お前のその髪の色は危ない。俺達が他の者達に事情を説明するまでは正体を隠してほしい。」  
その言い方がすごく優しく、なんだかお父さんを思い出してしまった。

ヴァシユカの方が若いしかっこいいけど。

私はわかった、とうなずいてマントをすっぱり頭からかぶって、一緒にクルネルを包み込む。

もうすぐこの子の故郷につくのかと思うと、どこか申し訳なく、そしてどこか嬉しくなった。

音がさつきよりも籠るマントの中で、耳を澄ませる。

人々のざわめきやロツティの蹄の音の中に、ヴァシユカへの挨拶が多く紛れていた。

ヴァシユカはどうやらこの街では有名ならしい。

ちらりと周りを窺うと、ほとんどの人は髪が青かった。

おお。神秘的。

私は少しの好奇心と、少しの不安を携えて、ジャックとソラリスの家へと連れられて行く。

## 05 異世界（後書き）

国名とかはすごく適当なんで、なんだそれ（笑）とか思える名前があってもあえてスルーでお願いします！

ソラリスとジャックの家は、街から少しだけ離れた村だった。小さいけれど、可愛らしい形の木造建築。

ヴァシユカがその家の前にロツティを止まらせた途端に、蹄の音に気付いたのか、赤いドアからソラリスが勢いよく出てきた。

「おねえちゃん！いらっしやい！」

蒼い少女は、白い頬をほんのり薄紅色に染めて微笑む。わあ可愛い。

私はマントをずらして、ヴァシユカに手伝ってもらいながら降りる。

「クルネルを。」

ヴァシユカに言われて、私は抱えていたクルネルを丁寧にマントで包んで、そっと渡した。

ヴァシユカも同じように丁寧に受け取って、優しく抱きしめた。

「じゃあまた来る。」

ヴァシユカはそう言って微笑むと、「けっ。もっとあたしに感謝しなよ小娘が。ヒヒーン」とか思っていそうな目を向けてきたロツティと共に歩み去って行った。なんだあの馬は。

少しさみしそうにその背中を見送っていたソラリスは、しばらくしてから、私の手をとった。

「じゃ、おねえちゃん入って！」

にっこりと微笑むソラリスに笑顔を返して、手を引かれていった。

家の中も綺麗で、可愛い。

初めて見る暖炉に、赤い光と透けるような陽炎を揺らしている。

「お？」

横の扉からひよっこりと、ジャックが顔を出した。

「着いたのか。疲れたんじゃない？すわりなよ。」

ジャックはにこ、と微笑んで部屋の中央にあるテーブルとおそろいの椅子を勧めてきた。

お言葉に甘えて座る。

「今昼食作ってるから、待ってて。」

そう言っただけジャックは暖炉でいろいじくったり、扉を出て何か忙しそうにしていた。

どこか申し訳なさを感じながら、隣に座るソラリスに目を向けた。

「おねえちゃん、服…。」

ソラリスが私を見て言う。あ、そうだった。どうしようか。

「待ってね。下手っぴだけど…わたしがやったげる。」

ソラリスはにっこりと微笑む。やる？何を。

ソラリスは私の胸のあたりに手を当てて、何か聞き取れない程小さな声で呟いた。

すると、私の服についていた赤色や泥などの汚れが腹や背を伝って胸に集まってくる。うぞうぞと。

はつきり言っただけすごい気持ち悪い。

うぞうぞ集まったやつはソラリスが手を引くとそれについて浮き上がっていく。

「おお！」

すげえ。なんだこれ！

すうっ、と浮き上がった汚れたちは、くるくるっと丸まって小さな球形に収まった。

「え？何、今の？」

私は、球を暖炉に投げ入れて、じゅわじゅわと音をたてて歪む炎を見ながら訊いた。

あんなものは見たことがない。

少なくともウチの人は皆できないことは確かだ。面倒臭くても洗濯機を使う。

ソラリスはきよんととして、

「お姉ちゃんの世界にはなかったの？魔法…。」

そんなことを言ってきた。

ある訳がないでしょう…。小さい頃はそりゃ夢見ましたけど。

最近寝てる間に放り出してしまったらしいケータイのアラームを布団から出ないでとめられないものかと考える際の手段の候補として上がったくらいだ。

夢ないとか言うな。二度寝の心地よさはあれだぞ…。うん。あれだ。良いぞ。…ああもう、国語力！

#### 閑話休題。

ソラリスは誇るような笑みを浮かべた。うわ、若干ムカつく。

「わたしたちはね、まほー使えるんだよう。」

へえ…。すごいな。それは。いや、まじで。

ソラリスの話によると、生活しやすいように工夫された魔法とか魔法具を使えるだけで、私が思い浮かべるような空を飛んだり、人の気持ちを読んだり、炎を操ったりするのは一般の人間には出来ないらしい。

「その言い方だと、使える人もいるの？」

「うん。いっぱい魔力を持つてる人はね。普通はそんなに魔力を持つたりできないから、ほんの一部。」

それに長い詠唱を覚えなきゃいけないかったり、複雑な魔方陣を作らなきゃいけないかったりするからすぐくめんどくさいんだよ。

大きな魔法ほど失敗したときの代償は大きい。



身体の一部が失くなってしまったりね。」

ソラリスは自分がモノを教えるというのが嬉しいのか楽しいのか、誇らしげな顔はそのまま話す。

しかしそんなところも可愛いと思うのだから、私は意外とロリコンなのかもしれない。あー、カミナに会いたい…。

「身体の一部って…。」

「それでも、魔法を使ったがる人は多いんだよね。

……こんな世界だし。」

ソラリスは綺麗な蒼の瞳に影を落とす。

…なんとなく、分かる。つまり、クルネルが殺されたことに関係してくるのだろう。

「でもね、詠唱も魔方陣もなしに魔法を使える人もいるんだ。わたしは王子さましか知らないけど、魔力が異常に高かったり、精霊と契約したり、魔法の高度な研究をした人とかは。」

「王子さま？」

ソラリスの話しは何がすごいのかイマイチわからないけれど、それ以上に気になるワードが。

日本でいうと皇太子さまか？王子って。

なんか日本は王とか王子とかそういうのにあんまり馴染みないからなあ。

「うん、王子さま！セノルーン公国の王子さまは優秀な魔法使いでもあるんだよ！かっこいいし。」

ソラリスが瞳を輝かせて語る。  
可愛いなあ。

しかし、ちっちゃい子が語るイケメンな王子って、すごい童話に出てくるようなTHE・王子って感じなのだろうか。それは見てみたいなあ。“本物の”王子というのも興味あるし。

どうでもいいけどTHE・王子ってTHEってついてるのにあんまり映画のタイトルっぽくない。

「あ…でも。例外はあるか…。」

その声に、私は意識をソラリスに戻す。

「天使さまと、女神さま…。」

「天使…に、女神？」

天使はさっきヴァシユカの話しの中に出てきたけど。殺戮兵器とか  
なんか…。しかし、女神とは？

「天使さまと女神さまはね、テレポート空間転移 とかが、詠唱も魔方陣も  
なしに使えるんだ。」

それは…すごいことなんだろうな、きつと。よくわからんけど。

「その天使とやらは…。」

言いかけたところで、ジャックが昼食を携えてやって来た。

そこで丁度私のお腹が切ない鳴き声を上げた。そうか、気付かなか  
ったけど意外と時間経ってるんだな。

質問は後にするか。そう考えて、料理が置かれた机に身体を向け  
た。

お昼は、ミートパイとコンソメスープだった。多分、少なくとも味はそうだった。

作り方とかは分からないからなんとも言えないけれど、食べ物に関してあまり心配はいらないみたいだ。

しかもかなり美味しい。

「すごい美味しい…。ジャック天才じゃない？」

「いや、そこまで褒められると照れるよ。」

柔和な笑みを浮かべてありがとう、と言うジャックはやっぱりカッコよかった。

「しっかし…ほんと綺麗だね。どういう原理なのか全然わかんない。」

「何が？」

ソラリスとジャックが揃って訊き返す。

「髪だよ。目もだけど、目が蒼い人は見たことあるしなあ。」

今はカラコンとかで変えられるしね。

でも髪は違うじゃん。

なんか違うじゃん。染めても“染めてる”感があるじゃん。

二人はそれとは違う。

鮮やかで、柔らかさそうで、地毛っていうのがちゃんと分かる。

「へえ。髪色が珍しいなんて言ったら、ナユの方がよっぽど珍しいけどね？」

ジャックの言葉にソラリスがこくこくと頷く。

「黒い髪なんて初めてみた。」

ソラリスは興味深そうに見つめてくる。ちよ、みられんの恥ずかしいやめて。

「黒い眼も初めて見る…。」

今度はジャックが正面から見つめてくる。横から前から見られてたじたじですよ、わたししゃあ。

「ひゃあつ!?」

何をするか!

いきなり髪を分けて私の首元を見るソラリス。

「【一角獣<sup>ユニコーン</sup>】じゃない…。」

「ちよ…。」

次は右腕の袖をまくられる。え、何なに?!

ジャックに目を向けると、真剣な目でその様子を見ている。え…えええ…?

「【紅の狐<sup>フォックス</sup>】でもない。【青龍<sup>ドラゴン</sup>】でも…いったあ!?」

いきなりスカートをめくってきやがったソラリスの頭を思いつきりはたく。

「な、何すんのおねえちゃん!」

「お前が何するかー!」

くそつ…家に帰ってすぐさま脱いってしまったジャージが恋しい!

ジャックを見ると赤い顔を手で覆って目を逸らしていた。うわ…あいつぜつてえ見たろ…。

くそつ、春め…!あんな中途半端なあったかさじゃなければ、スパッツにするかそのままジャージ着用でいるかどちらかにしたのに…!

「じゃあちよつと胸見してよ、おねえちゃん。」

「何でだよ!?」

「敵かどうか確認してるの!信じてるけど、でも一応!」

「ええええ…。」

そんな私の声は無視して、ソラリスは襟を軽く引つ張る。

「【銀狼<sup>ウルフ</sup>】でもない…と。」  
ソラリスちゃん、こんな性格でしたっけ…？

「【漆黒<sup>シュワツクン</sup>の鴉】ではないでしょう。食事してたし…。」

「うん！まぎれもない無所属！」

ソラリスはにこやかに笑うと、椅子に座り直す。

ごめんね！ってそんなにこやかに言われましても…。私としては何をされたのか全然分かんないんですけど。

「あ…。この世界ではね、昔から戦争が続いてて。その戦争が起こつてからは世界の人間たちは5つのグループというか…組織…  
っていうか。まあ別れたんだ。」

ジャックは私と目を合わせないまま話す。そこまで純粋な反応を見せられると私まで恥ずかしくなってくる。

…ふうん？それで。

「それがね、国民の中でも所属がバラバラになってしまつて、誰がどこの所属の者かが分からなくなつてしまつたんだ。」

「？ つまり、同じ国の人でも敵がいる状況になつてしまつた、と？」

「そう。だから、見分けがつくように“印<sup>しるし</sup>”をつけた。

【一角獣<sup>ユニコーン</sup>】は首の後ろに角の生えた馬が描かれた蒼い陣を。

【紅の狐<sup>フォックス</sup>】は右腕に九尾の化け狐が描かれた紅い陣を。  
ドラゴン

【青龍<sup>ウルフ</sup>】は左の…太もみに、龍が描かれた碧<sup>みどり</sup>の陣を。

【銀狼<sup>ウルフ</sup>】は左胸に大きな狼が描かれた白銀の陣を。  
レイヴン

【漆黒<sup>レイヴン</sup>の鴉】は舌に羽を上げた鴉が描かれた黒い陣を。

今、ソラリスはそれが無いかを確認していたんだ。」

なるほど。そういうことが。

「無所属の者はほとんどいないよ。身の危険を守ってくれる人もいないし、“狩り”で力を貸してくれる人もいないからね。まあ、【漆黒の鴉<sup>レイウン</sup>】は無所属みたいなものだけだ。」  
そこはよくわからない。  
と、いうか。“狩り”？嫌な響きだな。  
「じゃあ二人も何か入ってるの？」

私の話しに一瞬迷ったらしいジャックは、逸らしていた瞳を私に向けた。

それからふつ、と笑って。

「疑心暗鬼になるのはよくないね。ソラリスの命の恩人を疑う訳にはいかない。」

言って、こっくり頷いた。疑われていたのか。

「僕とソラリスは【一角獣<sup>ユニコーン</sup>】だよ。ソラリスの首の後ろを見てごらん。」

言われて、ソラリスは髪をあげて後ろを向いた。

「うわ、本当だ。」

ソラリスの首には、小さくて丸いごちゃごちゃした蒼い絵みtainのが書かれていた。しかし。

ユニコーン…？

小さくてよく見えないので、ユニコーンが書かれているかどうかなんてわからない。

どういう仕組みになっているのかと、陣に触れてみると。

いきなり陣が浮いて、お盆くらいの大きさに膨張した。

「え!？」

驚いていると、ジャックがいきなり立ち上がった。

「異世界の人にも…魔力はあるんだな。」

魔方阵は、魔力を持っている者が触れると膨らむんだ。

魔力を持っていない者なんて聞いたことがないから、不思議ではな

いんだけど……。」

え。私魔力持ってたの？

膨らんだ魔方陣にはしっかりユニコーンが存在している。

くすぐったいらしいソラリスの笑い声が響く中、私は新事実を発見してしまった。

全然現状に追いつけていない私は、馬鹿なのだろうか。

馬鹿なんだろうね。

「ご飯を食べ終わった後に、長つたらしい説明は疲れるから、と我ながらわがままな理由でいったん話を打ち切った。

ジャックも「確かにね。」と同意してくれて、寝床に案内してくれた。

「というかベットは二つしかないらしいので、ソラリスのベットにお邪魔になる。」

よく考えてみたら、夜中…というか時間のたち方からして明け方あたりから寝ていないのだ。

いや、それより私は昨日(?)の朝起きて学校に行ってから寝ていないじゃないか！

全速力でけっこう走ったしけっこう疲れてたんだな。

寝ようと思った瞬間なんだか緊張の糸が切れたみたいに、いきなり疲れが体を襲ってきた。

ぐったりしているのが自分でよく分かる。

ぐによんぐによんしてそうだ、私。

同じく疲れがたまっているらしいソラリスと一緒にベットに沈み込む。

ソラリスも子供だしな。

私はソラリスの頭をぽふぽふと数度撫でると、すぐに睡魔に意識をもっていかれた。



目を覚ましたのは、もう真夜中だった。そこまで寝るつもりはなかったので驚いた。横にいたソラリスは寝る前と服が違うから、一回起きて着替えたのだろう。

私は、起きて水を貰おうと台所へ向かった。すると台所には明かりがついていて、覗くとジャックがごそごそと身支度をしていた。

声をかけようか少し躊躇ったところで、「あれ？」先に気付かれた。「起きたんだ。ぐっすり寝てたから、疲れてたのになって思ってたこさなかつたんだけど…お腹すいたかな？」  
「…と微笑んで言うジャックは、動きやすそうな服を着ていて、腰には短剣が刺さっていた。

「んーん。別にすいてない。なんか時間が経った気さえしない…  
寝て起きたら夜、みたいな。」

「はは。」

「…どこか行くの？」

私の質問に、ジャックはこっくりとうなずいた。

「ちよっとお仕事にね。」

「仕事お？」

どうにもジャックは、【一角獣】<sup>ミニコン</sup>の戦闘部隊とやらの隊員であるらしく、夜中は警備などの仕事があるらしい。

「外には出ないでね。迷うよ。」

「そこまで広い村じゃなかったけど…。」

「そうじゃなくて。ここは、さっきの場所と違うから。」

「意味わかんない。」

「だろっね。僕もナユの立場だったら意味わかんないなって思った

よ。多分。」

ジャックは苦笑して、どういふことが教えてくれた。

なんでも、戦争は夜にしか行われなく、夜になると村や町が位置の座標を変えるらしい。

意味は何となくしかわかんないけど、なんとなくわかれば充分。

ようするに夜になるとここはセノルーンじゃない“どこか”になるわけだ。

ジャックの話だと、同族同士で殺し合いにならないように、だそうだ。

だから今、周りには【一角獣<sup>ユニコーン</sup>】の人間しかいないらしい。

「どこ行くのお…。」

欠伸を噛み殺しながら尋ねると、ジャックは図書館だよ、と言った。図書館？

「カモフラージュというか…作戦本部とか諸々がその地下にあつてね。」

おお。深い事情っぽいことを話してくれてる。私さつきより信用されてるみたい。

「…行ってみたい。」  
「ええ?!」

だって、なんかヒントがあるかもしれないし。元の世界に戻るための。

というか、

「まあ結果は大体予想ついてるんだけど、私が元の世界に戻る方法って…。」

一応ね。一応聞いてみようと思って。

ジャックは私の言葉に気まずそうに俯いて、首を横に振った。「僕には分からないね…。」

優しいねえ。

「いいって。分かってたし。これから探すし。…そのためにも。」  
私はゆるーく笑って。

「協力すると思っで。連れてってえさ。」

さて、じゃあ。優しさにつけこんでやるうじじゃないか。

私の“お願い”に、人のいいジャックは思っていた通りかなり渋々だったけど受け入れてくれた。

さて、味方の情報を流したとかでジャックが嫌な目に合わないよ  
うな自己紹介を考えなくてはねえ。

09 『玉』（前書き）

この話には残酷表現が含まれています。  
苦手な方はご注意ください。

図書館とやらは思ってたより大きかった。もしかしたら東京ドームよりもでかい。すう…。

感動している私に、ジャックはここは世界一大きい図書館なんだよ、と補足してくれる。

しかし、周りに張られている広告や案内板を見た限りだと、私はこの世界の文字が読めないらしい。

何か調べてみようと思っていたのに、これでは無理そうだ。

ジャックにそう伝えると、「セノルーンの言葉だからかなあ…。」と少し思案してくれていた。

やっぱり良い人だよなあ。

「やっぱり本部とやらに…それは駄目。」

僅かな希望をばつさりと切り捨てられた。

髪は帽子で上手く隠して、私はジャックについて来たんだけど、結局作戦本部に立ち入らせてもらえないような上手い案は考え付かなかった。

まあ、そもそも好奇心だしね。

「ジャック。」

いきなり名前を呼ばれて肩を跳ねさせるジャックの横で、私は声をかけてきた人物に目をむける。

「ヴァシユカ！」

ヴァシユカはジャックの反応に苦笑して、右手を軽く上げた。

「来たのか。」

「うん。わがまま言って連れてきてもらった。でもねえ。」  
私がこの本は字が読めないのだと伝えると、ヴァシユカは手伝いを申し込んできた。  
さすがにそれは悪いと思うので、丁寧に断って。  
本を一冊読むのはけっこう時間や労力があるものだ。  
それを他人にやらせるのは気が引ける。  
とくにヴァシユカのような良い人には。

あー、とヴァシユカは言いにくそうに私にちらりと目線を送って来た。

ん？と私よりも背の高いヴァシユカを見上げる。

「…靴は。」

「ああ、これ？」

私は履いているくるぶしほどのブーツを見下ろす。

「ジャックに借りた。」

「そうか。」

ま、明らかにそれが本題でないのは丸わかりだ。

「何？」

仕方が無いのでこちらからうながしてみる。

「いや。実は言おうと思っていたのだが…。その、ナユが帰る方法が、皆無…という訳ではないんだ。」

私は気まずそうなヴァシユカに、目線で続きを促した。

その感じからしていい方法じゃないことくらいわかるので、気分はあがらない。

「ただ、その方法はあまり薦めない。」

「でしようね。」

私の軽い受け答えに、ヴァシユカはやや目を見開いた。

「帰りたいんじゃないのか。」

「帰りたいよ？でも、ヴァシユカが薦めない帰り方で帰るのは無理

かな。いい方法じゃないんでしょ？」

ヴァシユカは目頭を緩く下げて、頷く。

信用してくれてるんだな、と小さく呟いて話し始めた。

「この世界での戦争の話はもう聞いたか？」

「組織に分かれてるとこまでは。」

「何故戦争が起こっているかは。」

そつえば知らない。

「理由のない戦争なんてないもんねえ。」

ヴァシユカは頷いて、蒼い瞳をまっすぐに私にむける。

「『玉』を探しているんだよ。」

「『玉』？」

何それ。美味しそう。

「『玉』ってのは…、その命に力を宿す存在だよ。」

横から、ジャックが説明を入れてくる。

チカラってアバウトな…。って笑うわけにもいかないけど。

「願いを何でも一つ叶えられるんだ。でも、『玉』は“誰”なのか、どこにいるのか分からないんだ。」

「『玉』って人なの？」

「ああ、今現在存在する『玉』は6人とされている。」

今度はヴァシユカが私の質問に答える。

ああ、なんか私が覚えの悪い生徒で、補習の時に先生が二人ついて付きっ切りで教えないと理解してくれない問題児みたい。

「いつ『玉』になるのかもわからなければ、『玉』本人ですら自らが『玉』だということを知らないらしい。」

なるほどね。

「つまり、その『玉』様だったら私を元の世界に戻せるかもしれない、と。」

「まあ、そうだが…。それには、『玉』の命がいる。」  
「…殺さなきゃいけないってこと？」

理解力が追いついてきてしまってる私が嫌だった。

「…そういうことだな。」

ヴァシユカは重々しくうなずいた。

「じゃあ。」

「じゃあ。」

「クルネルは、『玉』かどうかも分からないのに、確かめるために？ 私利私欲のために？ そんな理由で殺されたわけ？」

私は頬が熱くなっていることに気が付いていた。

怒りが沸々と込み上げてくる。

「信じられない…！」

「僕達もおなじだ。」

ジャックは低い声で言った。

「憤りを感じている。だから、僕ら【一角獣<sup>ユニコーン</sup>】の人間は戦線から離脱してる。それでも狙ってくる人は多い。僕らの中に『玉』がいる可能性だつて大いにありえるからね。」

だから僕ら戦闘部隊がいる。眉根にしわを寄せてくわえてそう言うジャック。憤っていることなど、言葉にしなくてもわかった。

そんな姿を見て、不謹慎にもかっこいいな、と思ってしまった。

「そんな方法で、帰るのは、薦めない。戦争に浸ることになる。」

ヴァシユカは溜息まじりにそう言った。

もちろんだ。

そんな方法で帰れるものか。

人を殺そうものなら、お母さんにぶつ殺される。

「ナユがそう断言できる人で良かった。」

ジャックはしかめていた眉間をゆるめ、微笑む。



「最終的にはもちろん帰るけど。帰るための手段は他を探す。」  
私はそう言っつて、笑顔を返した。

「ここで一生を終えるのも嫌だし、何十年もしてから帰って友達が大人になつてるのもいやだけど。」

ここには食べ物もあるし、寝床もある。それに、味方がいる。」

私は自分の言葉に、主人公みたいなこと言つてるな、と少しおかしくなつた。

今はただ、生きてる。それでいい。

ここまでこれたんだから、帰れるはずだ、と勝手な根拠をつけて。

それに。

「この世界でやることも出来たしね。」

私の言葉に、ジャックとヴァシユカは首を傾げる。

私はこの世界の戦争を、終わらせてやる救世主になろう。

この世界の歴史に刻まれるような、でっかい人間になつてやろう。何にも知らない世界でこんなことを思うのは、きつと無謀なことだけど。

魔法とかが存在するメルヘンな世界だぞ？

漫画みたいなこと思つていいじゃん。

恥はこの世界に置いてっちゃんえばいいんだから、今は正義を振りかざしてみよう。

「力を貸そう。」

ジャックとヴァシユカは、同時に笑つて言った。

イケメンが言つと絵になるよね。

自信つくし。

んじゃあ、すっげー頼りたってます。

なんか自分で言ったことが少し恥ずかしくなってきた頃に、ジャックが「そういえば」と切り出した。

救われたような気持ちで、ジャックの話を聴くと。

「なんでも知ってる、っていう噂がある研究者…？の話しを聞いたことあるなあ。」

「フォン・コリックのことか。…しかし、あれは…。」  
ジャックの話しに心当たりがあるらしいヴァシユカは、顔をしかめる。

何か気難しい人なのかな。

「その人だったら、『玉』を使う以外の方法での帰り方を知ってるかもしれない。」

ああ。なら、是非会ってみたいな。

意外と早く帰れるかもしれない。

さつきあんなこと言っちゃったから、帰る方法がわかってもらえばらくは気分的に帰れないけど。

「でもね、ナユ。」

「うん？」

「その人に会うのは、すごく難しいらしいんだよね。最低でも王さまとか、支部長さまとかの紹介状はないといけないらしいし…。」

「紹介状…ねえ。」

そんな人がいるのか。

「ちなみに噂だとここ二十年くらいは誰も姿を見ていないらしいぞ。」

「ええ!？」

それは予想外だ。  
そんな人に会えるわけないじゃん。

まあ、ダメ元なんだけど…。というジャック。

「ちなみに王さまに会うには城に行かなきゃいけないのかな。」

「会うつもりなのか!？」

ヴァシユカは私の発言に驚愕したように目を見開く。

「王さまが一番エラそうだし…。」

なんでそんなに驚いているのか。

「お…つまえは…。」

呆れたように息をつくヴァシユカ。

どうやら私は相当変なことを言っただらしい。

「無所属に、黒髪黒目。会う前に殺されるかもしれない。」

ああ、そういうこと。納得。

「じゃあ支部長でいいや。」

「でいいやって…。」

次はジャックに苦笑される。

昔から私は神経が図太いとか言われるので、こういう反応には慣れている。

「まあ、とりあえず支部長に話は通しておこう。」

ヴァシユカは苦笑交じりにそう言った。ありがとー。

「何かあったら大声を出せよ。」

ついてこい、と言って歩き出す。

「じゃあ僕はこれから会議だから。」

ジャックとはここでお別れらしい。

またあとでねーと手を振って、ヴァシユカの後を追いかけた。

大きな木の扉が隔てた空間の向こうに、支部長とやらはいるらしい。

ヴァシユカは先に話を通してくる。と言って中に入っていった。

しばらくして、ヴァシユカは出てきた。

「とりあえず、詳しいことは何も話していない。一対一で話したが  
っている者がいる、とだけ伝えてある。」

私は了解の合図を首の上下運動で示す。

「ここで待っているから、何かあったら、な。」

「うーい。キャーヘンターイとでも叫ぶわー。」

私の言葉に、ヴァシユカは柔らかく笑った。

中に入ると、小太りのおっさんがエラそうに、高そうな椅子に腰かけていた。

部屋はなかなか広い。私とおっさんの間は、5・6メートルくらいある。

「名前も素性も明かさない者と会うなどと。本来はしないのだがな。」

「

おっさんは不機嫌そうにそう言った。

「ありがとうございます…って言っといたほうがいいのかね。」

私はどうでもいいなと思いつながら言った。

「無礼な奴だな。女か。」

「性別を聴いてるんだったら、女。」

「…ふむ。思っていたよりも面白い奴のようだな。」

本当にそう思っているのか。

不機嫌そうな顔のままおっさんは言った。

おっさんはイラ・ゴーイシュと名乗った。

正直名前なんてどうでもいいんだけど。

「用件はなんだ。」

おっさんはふてぶてしく、頬杖をついて言う。

「フォンさんに会いたいので、紹介状を用意して。」

「断る。」

はええよ。どんだけだよ。性格悪いな。

「頼み方が気に入らんな。」

めんどくさいな。私こういつの苦手なんだよな。

ヴァシユカには悪いけど、私のやりやすいやり方でやらせてもらおう。

「ごめんね」。

「もつと丁寧なこと」「うるっせえな。」

割り込んだ私の言葉に驚いたようにおっさんは目を見開く。

「私、頼んでるんだよね。」

「なっ…。」

「交渉じゃないんだよ、おっさん。」

「おっさ…!?!? 無礼者め!」

おっさんが顔を赤くして手元にあるベルみたいなのに手を伸ばす。

人を呼ぶやつか？

とりあえず取り上げようか。

そう思ったち、私は一歩で距離を詰めて、おっさんの手元から白いベルをすりぬくように取り上げた。

「ごめんね」。私、敬語とか苦手です。敬意を持てる奴にしか敬語って使わねんだ。」

「あ…。」

私の足の速さに、驚愕したらしい支部長さんは、赤かった顔を段々白くしていく。

「書いてくれっかね？」

こくこくと無様に頷く支部長。私が悪者みたいじゃんか…。

涙目なのはいい大人としてどうなんだろうか。

「あつと、私の行動をできるだけ広範囲で許してくれる感じのやつも書いて。」

「…分かった。」

暴君にでもなった気分だ。罪悪感。

何それ美味しいのー？とかでごまかしてしまおう。

「あー、ヴァシユカは友達だから。恨まないであげてねー。」

それだけ言つて、にっこりと微笑んでみた。

イメージはお父さんである。

お父さん怒ったら怖いからね。

私は紙に何語か分からない文字を書き連ね始めたおっさんを横目に見ながら、手にしていたベルを鳴らした。

10 脅迫（後書き）

なんかおかしな話になりました（笑）  
遊び心を取り入れたので。

次はちゃんとした話にします。たぶん。



## 11 弔いの儀

部屋を出ると、ヴァシユカがどうだった、と訪ねてきた。私は貰った二枚の紙をヴァシユカに差し出す。

ヴァシユカはそれに目を通すと、驚いたように目を見開いた。

「何をしたんだ…？」

「んー？別にー。書いてーって頼んだら書いてくれた。」

私は適当に答えて、息をつく。

どうやら、ちゃんとした内容になっているようだ。

私は字が読めないので少し心配だったのだが…。

今考えてみると、あれは最悪の手段というやつだったなあ、とちよっと反省。

ヴァシユカによると、ものすごい好評価が書かれているらしい。

これで大抵のところは入れるだろうとのこと。

へえ、そうなんだ。

「すごいな。有言実行というやつか。」

ヴァシユカはそう言って笑うと、紙をこちらへ返してきた。

ありがとう、と返して受け取って、私たちはジャックが終わるのを待った。

しばらくしてからジャックがやってきて、私の為に傍に残ってくれていたらしいヴァシユカとはお別れになる。

私はお礼を言って、「またねー」と手を振ってヴァシユカと別れた。

ジャックにもさっきの成果を見せて、驚きと称賛の言葉をいただいた。

「ゴイシユさんは…けっこう頑固な人なんだけどなあ。」  
少し不思議そうに首を傾げるジャックだった。  
頑固ねえ…。

図書館から出ると、空がうつすら明るくなっていた。

「…ん？」

あれ。何あれ？

よく見ると、空には光る煙のような何かがうつすら漂っていた。さらに、目をこらしてみれば。それがそれぞれ色違いだということも、数字を表しているものだということも分かる。

「何…？あれ。」

「ああ、あれね。」

ジャックは私の指さす方に顔を向けて、少し顔をしかめた。  
ん？

「あれは、カウンターだよ。各色の組織に生存している人間の数を表してるんだ。」

「えっ…。」

それじゃあ…。あの数字がひとつ減れば、一人の人間が命を落とすということになるのか。  
でも…。

「黒は…13、って書いてあるように見えるけど？」

他は何千人とか何万人とかなの…？

「【漆黒レイウの鴉】は、数が少ないんだ。だからこそ、見つけにくい。」

「じゃああの中央の金色の数字は…。6…。」

「あれは、今生きてる『玉』だよ。さっき説明した。」  
ああ、なるほど。

あれで『玉』かどうかを見極めているんだ。

「あのカウンターが出てくるのは夜だけなんだよ。」  
だから、今はぼんやりしてるのか。

「早く帰らないとね。ここはあまり変わらないだろうけど、時空の歪みは少し…頭痛がするから。」

「夜だけ別の場所にいくとかなんとか言ってたやつ？」

「そ。」

そう言つて、ジャックは美しい微笑みを見せた。

私はわかった、と頷いて、帽子を深く被り直した。

ソラリスが目覚める前に帰らなければ。

ジャック達の家に戻ると、私はもう一度ソラリスの横に寄り添つて、眠りについた。

次に目覚めたのは正午に近い頃だった。

ソラリスが、あったかいスープを携えてやってきたので、起きてそれをごちそうになった。

美味しいなあ…、と思つているところに。

ノックの音があり、その後にジャックが部屋に入って来た。  
青いスーツを着用している。

かっこいい人は何を着ても似合うものだ。

ジャックは青いワンピースを抱えていた。

気が付けばソラリスも薄い青のワンピースを着ている。

「これ、ナユに。」

ジャックが抱えていたワンピースを私に渡してきた。

ん？

「借りてきた。着れるといいけど……。」

ジャックは薄く微笑んで、スーツより少し濃い青のネクタイを直す。

「え……。これ着んの？私が？」

なんで。という疑問は、ジャックの次の言葉でかき消された。

「今から、クルネルの葬儀なんだよ。」

「え。」

「村のみんなにはナユのことを話してあるからね。出て行っても大

丈夫。」

「そ、うなんだ。」

そういうことならば、行かなければ。

だけど。

罪悪感がやっぱりあって。葬儀で人に会うのは、少し心苦しい。

ジャックに訊いたところ、青の国では、青は神聖なものとしていて、正装も喪服も全て青なんだそうだ。

明るい青のワンピースは、私にはもったいなくらい綺麗。

髪の毛をソラリスに梳かしてもらって、ワンピースを着てみた。

「お姉ちゃん似合うよー。」

ソラリスにそう微笑まれても、いまいち自信が湧かない。そもそもこういう女っぽい格好は似合う筈がないんだよね。

「なかなか、可愛らしいものだな。」  
横からの声にビツクリして振り向けば、隣にはいつの間にかヴァシユカがいた。

「背が高いからかもしれんが、よく似合っている。」  
「照れくさいからやめてけれ…。」  
ワンピースの裾をあげたり下げたりしながらふわふわ感を味わっていたら、ヴァシユカに手を引かれた。

「では行こうか。そろそろ始まる。あの子の、弔いの儀が。」  
私は頷いて、ヴァシユカについて歩きだした。

ソラリスが手渡してきてくれた青いブーツに足を通して、ヴァシユカの手にひかれて外に出る。

ソラリスはジャックに手を引かれて、少し前を歩いている。  
私とヴァシユカはその後ろを歩いて、葬儀の場になるといっぺん丘へ向かった。

丘には、一面の緑と、沢山の白い花が揺れていた。  
風が穏やかに人の髪を弄んでいく。

そんな心地の良い美しい場所に、青の花がたくさん咲いている。

青のスーツを着た男性たちと、青のワンピースを着た女性たち。  
中央には白い棺があり、それを囲むようにして、その花たちは咲いていた。

私たちがそこにたどりつくのと、周りに人が集まって来た。

「ヴァシユカ公。その方がナユ讓でありますか。」

一人のご老人がヴァシユカに声をかけた。

「ああ。」

その返事をきいたおじいさんは、私に深々と一礼をした。

「この度は、我が村の宝である姫たちを救って下さって誠にありがとうございました。

礼を言っても言い切れません。

貴方様のお陰でソリス讓の命と、クルネル讓の誇りが、無事我らの元へと還ってきました。

我が村の者一同、心より感謝いたします。」

その言葉に、周りの人たちも一斉に頭を下げる。

罪悪感が、痛む。

「私は…何も出来なかったから。お礼なんて…。

クルネルを守れなかったうえに、逃げることしかできなかったから…。ごめんなさい。」

私の言葉に、おじいさんは勢いよく顔をあげた。

「何を言っておられますか！

何も出来ないだなんて！十分なほど、貴方様はご尽力なされました！本来ならば、こうして美しいままの亡骸が、これほど早く我らの元へ帰ってきてくれるなんて、奇跡のようなものなのですよ。

貴方様の望みを全て答えようとも、わたくしどもの恩は返しきれません。」

おじいさんはそういって、もういちどありがとう、と頭をさげた。

「そうですよ。ナユ様。二人が帰ってきた、それがどれほど嬉しいことか。」

傍にいた女の人が私の手をそつと握って言った。

蒼い瞳を潤わせて。

「笑って下さい。どうか、悲しまぬよう。あの子に、寂しい想いをさせぬよう。」

淡く、泣きそうな笑顔を浮かべる女性をみて。

ひよつとして、と思った。

「クルネルの…お母さんですか？」

私の質問に、女性はゆっくりと頷いた。

「わたくしはとても、幸せにございます。娘が蒼の誇りを携えたまま帰ってきてくれましたから。」

私はどことなく震えているその声に、笑顔なんて返せるはずがなかった。

ヴァシユカの手を握る右手に力を籠めて、深々と礼を返した。

「気負わないで下さいませ、と最後に言って、おじいさんたちは棺の元へと向かって行った。」

しばらく顔をあげることができずにいた私の頭に、ヴァシユカがそつと、手を置いた。

「お前は何も悪くないからな。」

優しくかけられたその声は、音を漏らさないようにしていたのどには毒だった。

私なんかよりも辛い人がたくさんいるのに。

その人たちは辛くても笑顔を見せているのに。

そう思っても、私は泣かずにはいられなかった。

自分の非力さを、思い知らされる。

暖かく吹く風には、少し甘い香りがまぎっていたような気がした。

## 11 弔いの儀（後書き）

誤字・脱字がありましたら、遠慮せず指摘してください。

重い話が続いていますが、そろそろ抜ける予定なので、もうしばらくお付き合いください！

自分でもどこへ向かうのかわからない話ですけど、これからもよろしく願います！



## 12 スイカとソブマ

幸せを願う蒼の炎で、仲間を弔った。

蒼い花がゆらりゆらりとかぜに弄ばれながら、さらさらと音をたてた。

悲しみが包む静かなその場所は、そこだけ時間が止まっているような感覚がした。

蒼の炎が全てを焼き尽くして、私たちは一人の仲間を見送った。あの美しい炎は、棺と共に姿を消した。

後でヴァシユカが教えてくれたけど、蒼の炎で弔った者の魂は風に運ばれて墓に眠るのだと言い伝えられているそうだ。

クルネルとの別れを終えたら、その後は宴だった。

その後はみんなが笑顔で、悲しみなんて吹き飛んでしまうようだった。

盛り上がって、いろいろな物を食べて、お酒を飲んで、騒いで。私も何度もお酒を勧められた。未成年です。

その宴は、昼を過ぎてもしばらく続くことになった。

その日の午後は、ソラリスの案内で街を回った。  
制服に着替え直して、帽子を目深にかぶる。

物知りなフォンさんとやらに会いに行くのは明日とかにしようと思っ。

ヴァシユカの話したと、フォンさんは夜のこくわずかな時間しか起きていないらしい。

それも噂らしいけど。

聴いてはいたことだけれど。フォンさんに会うのは想像以上に難しいらしい。支部長さんの紹介状ごときで会ってもらえるものじゃないという話し。

何でも、国王や王子ですらなかなか会うことはできないそうだ。

昼間に窓から光が見えることもしばしばあって、その時をねらって訪ねに行く者も多いのだそうだけれど、反応が返ってくることはまずない、と。

まあ二十年誰とも会ってないんだもんねえ…。

どうやって暮らしてんのか知らないけど。

「じゃあ、会えないかもしれないねー。」

と、ヴァシユカに言ったら。

「好奇心だけで生きているような人だから、興味をもってくれる可能性はあるかもしれない。」  
と、返された。

まあ、とにかく。

今日はゆっくりと眠りたいので、明日だ。

よくよく考えてみると、学校がないので起きる時間が縛られてないのだ。

なんと快適な生活だろうか。  
だからといって、このままここに住むのかと問われれば、答えはやっぱり決まっているけれど。

「おねえちゃん、ここがルマーレ市場だよ！」

ソラリスに連れられてきたのは、人がぎわう市場だった。

私は市場なんて行ったことがなかったので、少し新鮮だった。

スーパーとかコンビニのないこの世界では、お肉はお肉の専門店、雑貨はその種類によって違う店で、生活用魔法道具は魔法用具専門店、という風にすべてがバラバラに売っている。

屋台のような物も多く並んでいて、あらゆる方向から鼻とお腹を刺激する誘惑の香りが漂ってくる。

そんな沢山の食べ物の中には、私のみたことのない食べ物も多くあって。

物珍しく見ていたら、物欲しそうな顔をしていると思われたのか、ソラリスが「何か食べる？」と聴いて来た。

なんだかくいしんぼうみたいだな、と恥ずかしくなりながら丁寧に断った。

そんな中、くだものらしきものを売っている屋台に目がついた。

その中に、スイカによく似た果物がある。

私はソラリスの服の裾を引っ張って、とてとてと先に行こうとする彼女を引きとめた。

「どうしたの、おねえちゃん？」

ソラリスは足を止めて、可愛らしく首をかしげる。

どれくらい可愛いかっていうと、いつの間にかおしるこの中で溺れてたペットのハムスターくらい可愛い。実際にそんな状況にあったら対処できないけど。

「ねえ、あれってスイカ？」

緑地に黒の縞模様が特徴的な無駄にでかいそれを指して言うと、ソラリスは不思議そうな顔ですいか？と反芻した。どうやら違つらしい。

「あれはソブマだよ。すごい甘い果物だよ。おねえちゃんの世界では、スイカっていうの？」

そぶ…？変な名前だな。

「あー、うん。見た目はスイカなんだけど…。よく夏にスイカ割りつていう遊びをするんだよね…。」

「へえー。おにいちちゃんたちもよく剣技の鍛錬とかで使ってるよ。硬いし大きいから丁度いいんだって。片付けも楽し。」

ふうん。なるほどねえ。…ん？片付けが楽？

私がスイカ割りをやった時は、けっこう片付けるのに苦労したものだけど…。

「片付けは難しくない？水っぽいから…」

「確かに水気は多いけど…、実が硬いからそうでもないよー？」

んん？  
何か食い違いがあるぞ？

「ソブマって実が赤くて種が多くて…」

「ううん。実は白いよ。種も大きいのが一個入ってるだけ！」

あらあ。

「見た目が一緒でも中身は別物なんだな…」

「おねえちゃんとこの…すいかは違うの？」

「うん。」

何だか面白いなあ。

しかし見た目が同じで中身が違うものというのは興味が湧く。

「食べてみる？」

というソラリスの言葉に頷こうとしたとき。

がしゃん、と何か崩れた音と女性の悲鳴が聞こえてきた。

何事かとソラリスを見ると、ソラリスは眉をひそめていた。

静かに私の手を握る。

どうしたの、と聴くよりも先に。

「おねえちゃん、逃げよう。」

ソラリスはそう言った。

「なに、なんで？」

「あれは、赤の国の奴らだよ。多分だけど……。」

なんだ。

赤い奴はろくでもないな。

「ジャックを出せ！」

半壊した屋台が立たせた砂埃の中から男の叫び声が聞こえてくる。  
ジャック……？

「おにいちゃんは、立場上ああいうタチの悪い人によく喧嘩売られるんだ。あのお店の人には悪いけど……、わたしにはどうしようもないから。せめて見つかって人質にされちゃうのを避けなきゃ……。」  
ソラリスの言葉からは、悔しそうな色が見えていた。

非力な自分を恨むかのように。私の手を握っていた手にチカラが入る。

そういうことなら、ソラリスを守らなければ。

ソラリスが踵を返すのに合わせて振り返る。

目の前には一人の男が立っていた。

「……………」

息を呑むソラリス。

その男は燃えるような赤い瞳で、ソラリスを見下ろしていた。

### 13 英雄

「お前、ジャックの妹だな？」

その言葉で、私はこいつが敵だと分かった。

ソラリスの手を引いて、掴みかかろうとしてきた男から引きはがす。

「んだ…、てめえ…！」

睨みつけてくる男を睨み返す。

周りの人たちは私たちから距離を置きながら心配そうにこちらを見詰めてくる。

「随分乱暴なことすんだね。今更ボクはロリコンなんですとか言っても信憑性ないよ？」

「ああ？」

私の言葉に、男は苛立ちをあらわにする。

短気すぎるだろ。そう思いながら、体格のいい男を睨む。

決して目をはなさないで、足に力を込めた。

「見つけたか。」

後ろから、4人の赤髪の男がやって来た。

ちっ。めんどくさい。

「その子供をよこせ！」

叫んで、飛びかかってくる男を避ける。

どっこい？

上に。

私は力強く大地を蹴って飛び上がった。

「きゃあ、あ！」

悲鳴をあげるソラリスをしっかりと抱きしめる。

「ごめん、捕まってて。」

私の言葉にソラリスは顔から恐怖の色を消してこくりと頷く。

正直、自分でもここまで飛べるとは思わなかった。

この間の逃避行で自分でも驚くほど速く走れた足だからひよっとしたら、と思っただけである。

上昇は10メートルあたりで停止して、ゆっくりと降下する。

私は片手でソラリスを抱いて、もう片手で靴を脱ぐ。

持ってて、とソラリスに靴を渡し、スカートの裾を気にしながら意識を足元に向ける。

飛び上がった私の姿にぽかんと口を開けている五人の男の一人の顔に着地して、ふぎゆるっ、とか言ってる足元の男を押し倒す。

仲間の一人が柔らかい地面に半身を埋めたのを見た男たちは我に返ったように懐からナイフや鞭を取り出した。

そんな男たちの中で、一番近かった者の腹部を、思い切り蹴り飛ばす。

男は仲良子よしささせていた地と足を引きはがし、肉屋の屋台に背中からぶつかっていく。

そこでやっと現状の危険性を察知した馬鹿な男たちがまとめて襲いかかってくる。

前からナイフを突き出してきたひよろした男の攻撃をしゃがんでかわし、後ろから殴りかかってきた体格の良い男とお見合いをさせる。



ひよる男の突き出したナイフはこぶしにはじかれ、そのままくると回転して飛んでいく。

体格の良い男は慌てながらも勢いを殺しきれずにひよる男を殴り飛ばした。

ソラリスから手を放し、仲間を殴って動揺した男の腕を掴んで、倒れた男の後ろから奇襲を仕掛けてきた男めがけて背負い投げをする。

体勢を崩していた男はいともたやすく投げられ。

鞭を振りかざしていた男は前の男に隠されていた視界からいきなり大男が降ってくる形になったので、対処の仕様もなく。自分に影を落とす大男を絶望的な表情で見上げていた。

どすん、と大きな音がして、二人まとめて倒れ込む。

頭を押さえながら真つ赤にした顔をあげる大男に、ソラリスを抱え直して駆け寄る。慌てて腰をあげようとした男の顎を吹き飛ばす勢いで蹴り飛ばした。

男はたまらず意識を飛ばす。

今日はなんだかいろんなものが飛んでいくなあ、とか愉快に思った。

ふう、と緊張をとり、いつの間にか落としていたらしい帽子を慌てて拾ってかぶり直す。

髪を掻き上げて帽子の中に隠すも、もう遅いだろう。

「やっちまったー、とか思いながら。伸びている男たち5人を見る。あ。肉屋。」

くるりと肉屋の屋台に向き直る。

「あー。ごめんなさい、お店。」  
ビックリしたように、へたり込んでいるぽっちゃりしたおじさんにそう言つと、おじさんはにっこりと笑顔を浮かべた。

え？

「いやあ、お嬢ちゃんすごいねえ！かつこよかったよ！」

おじさんは立ち上がりながらにこにここと微笑む。

「店のことは気にしないでくれ！あそこまでやっつけてくれるなんてなあ！すつきりしたよ。いつも困っていたんだ。ジャックくんは駆けつけてこれるほど暇じゃないからね、耐えるしかなかったんだけど。」

「いやあ、感動した！と笑いながらこちらへ歩み寄って言うおじさん。なんか感謝されてるっぽい？」

わああああ、と辺りから拍手喝采雨嵐。

おお、ヒーローみたいな状況になってる。

「いや、ソラリスを守るうとしただけで…。」

ソラリスに目を向けると、涙目でふるふるしてた。

「わあ！ごめん、怖かった？」

「んーん。だいじょぶ…。」

私はソラリスの背中をぼんぼんしながら、周りに集まってくる人たちに戸惑っていた。

市場にいた男の人たちは気絶した男たちを協力してがはがは笑いながら縛り上げる。

「お姉ちゃんすごいねえ！おばちゃんもう笑いが止まんないよ！赤の野郎どもは…、本当にもう…。」

「お嬢ちゃん俺の店の魚持っていきな！」

「もっと顔をよく見せとくれよ！」

とか言われてぎゅうぎゅう詰め寄ってくる人たちにたじたじになる。

「もう、狭いよ！おばちゃんたち、落ち着いて！離れて！」

ソラリスが大声で言う。

耳がキーンとする。いきなり耳元で叫ばないで…。

不意打ちを食らった形でくらくらする頭を押さえて、ソラリスの言葉で若干離れたおじさんおばさんたちに苦笑する。ソラリスをそつとおろして、靴を受け取る。

足が汚れたので、帰るまではこのままでいよう。

目立ってしまったけれど、みんな避難して離れたところにいたということと、動きの速さと砂埃で私の顔はあまり見えなかったらしいので、なんか髪のこととは意外と平気そうだ。

「おねえちゃんはわたしを二回も助けてくれたんだよ。」

何故か誇らしげなソラリスがにこにこしながらおばちゃんたちと会話していた。

「おねえちゃんはずごく足が速いんだ！」

「ソラリスちゃんの知り合いかい？」

「うん、昨日からウチに住んでるの。」

「へえ！今度ウチの野菜持ってつたげるねえ。」

「ありがとう！」

みたいな会話。

結局、帰ったのは日が暮れる頃になってしまった。

帰り道、手をつないで帰る私とソラリスの反対の手には、果物やお肉がたくさん入った紙袋が抱えられていた。

「へえ。そんなことがあったの。だから警備隊とかが慌ただしかったんだねー。」

ジャックはポトフをゆっくりと器の中でかき混ぜながら言う。

帰って来てからすぐに、ソラリスは今日あったことを夕飯の支度を終えていたジャックに語りまくったのだ。

ジャックは感心したように笑って、それから手を止めた。

「ごめんね、僕のせいだ。」

申し訳なさそうにするジャック。

「言っておくけど。」

私は嘆息して、スプーンでジャックを指す。

「あれがジャックの所為だって言うなら、捕まりかけたソラリスの所為でもあったし、気の荒い私の所為でもあるから。」

私の言葉に、いきなり名前を出されたソラリスはびくりと肩を揺らす。

「もちろん、ソラリスの所為なんかでは絶対じゃないし。ソラリスの所為じゃないんだから、ジャックの所為とかでもないんだよ。」

自分でも若干言っていることがめっちゃくちゃだなあ、と思っていた。でも、本当に。あの場にいなかったジャックの所為になんてできるもんか。

ソラリスは私の言葉に、にこりと笑って頷く。

「そうかもね。ありがとう。」

ジャックもにっこりと笑う。相変わらずイケメンである。

「まあ、私の所為ではあるかもしれないけど。」

私は今日のことを思い浮かべながら苦笑する。

「まさか。それこそ馬鹿な話さ。ナユはまたソラリスを助けてくれたらろう?」

「うん! かつこよかった、おねえちゃん!」

ありがとう、と素直に礼を言ってくるこの兄妹を見るとなんだか、ひねくれてる私は少しくすぐったさを感じる。

それから夕飯を食べ終えた私たちはこの世界と私のいた世界の話をお互いにしあつて盛り上がった。

知らない世界というのは面白いもので。

私のいた世界と似ているところもあれば、全然違うところもある。夢みたいな世界だな、と思った。

もしかしたら私のみている夢なんじゃないかな、とか思ったけど、こんなに食べ物がおいしい世界が夢なわけない。

それからソラリスと一緒にベットに入って、意識を閉ざした。長かった一日が終わる。

## 二日目終了

翌日。目が覚めると、玄関から人の気配がした。

気になって見に行ってみようと、ベットから降りる。

眠っているソラリスをそつと撫でて、部屋を出る。

もう日は昇っていて、部屋の中は十分に明るい。

部屋を出ると、帰って来たらしいジャックと、何故か一緒に入ってきたヴァシユカに会った。

「あれ、どうしたの。ヴァシユカ?」

私に気付いたヴァシユカは微笑んで、羽織っていたマントを脱ぐ。

「ああ、お茶に誘われてな。」

「仕事？」

私の質問に、ジャックはそうだよ、と答えながらポットでお湯を沸かし始める。

魔法で出来ているらしい鍋置きみたいなやつに乗せるだけでお湯が沸くらしい。

不思議だ。それ自体は全然熱くないんだけどなあ。

「こんな時間までお仕事してるんだね。」

「最近ちよつと治安が悪いからね。人手も足りないし。」

「ふうん。大変そうだね。」

私はヴァシユカが椅子に座ったのをみて、向かいに座る。

ナユも飲む？と聞かれたので、お願いした。

「お仕事、手伝おうか？」

と言ったら、

「そこまで心強い言葉はないな。」

ヴァシユカに笑って返された。

「女の子に危険なことはさせられないよ。」

ジャックは良い香りのする温かいお茶を差し出しながら苦笑した。

ヴァシユカも、ジャックからお茶を受け取りながら気持ちだけ貰っておこう、と笑った。

そういえば、少し気になっていたことがある。

「ジャックとヴァシユカって、仲良いんだね。」

私がそういうと、二人は同時に微笑んだ。

「そうだね。ヴァシユカにはちっさいころからお世話になってるからね。」

「俺もだ。ジャックは付き合いが結構長いな。」

本当に仲が良いんだな！。

「そういえば、二人はいくつなの？」

以前から気になっていたけれど。

「19」

ジャック。

「24」

ヴァシユカ。

「…大人だね…。」

「そうか？」

分かってはいたけれど、年上さんでした。

それから、三人でお茶を飲みながらしばらく話した。

二人とも落ち着いている人だから、大人っぽさがすごく感じられる。クラスの男子と比べてみると、余計にそう思う。

あいつらも数年したらこういう感じになってくれるのだろうか。  
…ないだろうなあ。

「ねえ、ナユの家族はどういう人たちなの？」

ジャックが、マグカップの中から私に視線を移して訊いてきた。

「そういえば、訊いたことがないな。そっちの話しは。」

ヴァシユカも興味深そうに言う。

「んー。別に…。普通の人だよ。」

私はマグカップを持ち上げて短く答える。

「訊かれるの嫌な話だった？」

私のそつけない態度を勘違いしたのか、ジャックが申し訳なさそうに言うてくる。

「いやいや、全然。ただ、本当にふつつーなんだよね。どんな人っ

て訊かれても…。ありきたりな一般家庭を思い浮かべて、って感じなの。」

「ほう。父母と暮らしているのか？」

「ん？…いや。」

私は頭の隅に浮かんだアホ面を思い浮かべて、若干言葉を濁す。

私の反応に何かを悟ったらしいジャックが、

「兄妹とかいるんだ？」

と、微笑んで言ってきた。

「まあ…兄貴が、ねえ。」

「へえ、兄か。ジャックと同じだな。」

ヴァシユカがそんなことを言う。

「まさか。全然そんなことないよ。兄貴がジャックみたいな人だったら私はもつと可愛く育つてたね。きつと。」

幼い頃に兄貴を殴ったり蹴ったりした記憶が思い起こされる。

ん。思い出してみると私の気性が荒いだけで、兄貴の影響はなんら受けていない気もする。

まあいいや。言わないでおこう。

ジャックとヴァシユカは私の話しの何が面白かったのか、すごい笑顔だ。

なんか馬鹿にされてる感じがする。

「兄のことを好いているのだな。」

ヴァシユカがさらりとそんなことを言い放つ。

はああ！？いやいや。まさか。嫌いじゃないけど好きじゃないよ。あんなの。

「でも良い人なんでしょう？」

ジャックの言葉に、玄関で子猫と戯れていた兄貴を思い出した。



私はまさか、と苦笑してお茶を飲み干す。  
甘く温かいお茶は、私の頬を火照らせていた。

日が真上に近い辺りまで昇ってくると、ジャックは寢息をたて始めてしまった。

それに気付いて、ヴァシユカと顔を見合わせて微笑んだ。夜に寝ていないのだからそりゃあ眠いよな。

私はジャックの寝室から毛布を取って来て、椅子ですやすやと眠るジャックにかけてあげた。

ジャックは痩せてるから、やろうと思えばお姫様だつこで部屋まで連れていけると思うんだけど、それだと多分起きてしまうので。ジャックが自分から起きてベッドに向かうまではこのままにしておう。

ヴァシユカはそれを見届けると「じゃあ俺も失礼する。」と笑って、マントを羽織る。

「ごちそうさま。」  
そう言つと玄關に向かう。

私も外まで見送ろうとついて行く。

扉を開けて外に出ると、ヴァシユカがくるりと振り返った。

「今日は楽しい話をありがとう。俺もこんな妹がいたら楽しかっただろうな、と思つたよ。」

そう言つてにつこり笑つと、私の頭を優しく撫でた。

私は少し照れくさくなって、曖昧に笑う。

そんなこと言われたことないから、すごい嬉しい。

私のお姉さまになって！とか言われたことはあるけど…。

ヴァシユカがロツティを撫でて、軽やかに跨るのを見届けて。

「何見てんじやオラ、小娘コラ、ご主人はあたいのもんじやオラ、ヒヒーン」みたいな顔で睨んでくるロツティに苦笑いする。手綱を器用に操って、ロツティを反転させるヴァシユカにじやあね、と手を振る。ヴァシユカは振り返らずに、片手を軽く上げて蹄の音と共に遠のいていった。かっこいいなあ。

家に戻ると、ソラリスが椅子に座っていた。

「おはよう。」

と声をかけると。

「あつ、おはよう！おねえちゃん！」

安心したような顔を浮かべるソラリス。

そのまま私に抱きついてくる。

「な、なに？」

どうした？って訊いてみると。

なんでも、朝起きたら私がいなくてもものすごく慌てたらしく、キッチンに来てみても誰もいなかったから私がいなくなってしまったと思っただけらしい。

元の世界に帰ってしまったのではないかと。

それは悪いことをしたねえ、と頭を撫でると、ソラリスは柔らかく微笑んで私から離れた。

「おにいちゃん寝ちゃったんだね。」

ソラリスは椅子に座り直して言う。

「うん。疲れてたんじやないの。」

「多分そろそろ起きるよ。」

ソラリスはぐてー、と机に突っ伏して言う。

え？さつき寝たばっかなのに？

どういふことか訊こうとしてジャックに顔を向けると、

「うわっ！」

「わあ！？」

いきなり飛び上がるようにして起き上がった。

同時に椅子を倒して、がったーん！うわあ！きゃあ！ごめん！みた  
いになる。

「ごっ、ごめん！寝ちゃったっ！あ、と。朝ごはん作らないと  
…。」

慌てて髪をくしゃくしゃやって椅子を元に戻す。

すごいびっくりした。

もう朝食の時間帯だけど、朝食の用意を始めたジャック。

「なんでわかんの…？」

私はソラリスに目を向ける。

ソラリスは机の上に残っていたマグカップをいじくりながら、

「おにいちゃんのことは大抵分かるよー。」

とか適当に答えた。

そういうものか？私兄貴の行動とか全然分かんないのだけれども。

二人の仲の良さを痛感させられた。

朝食（昼食）を済ませると、ジャックは一休みすると自室に戻っ  
ていった。

私はソラリスとキッチンで絵本を読んだり、ソラリスの髪を結った  
りしていた。

絵本は有名な白雪姫とかシンデレラみたいなのもあるにはあるけれ  
ど、どちらかというと「魔法が使えなくなってしまったら」という  
感じのお話が多かった。

確かに、普段から魔法を使える人からしてみればそういう話の方がわくわくするのもかもしれない。

まあ全部が全部そういうものじゃないのだけでも。

すごく強い大賢者のお話とか、小人のお姫様の話しとかは絵本が無いのでソラリスに語ってもらった。

その間にソラリスの美しい蒼い髪を三つ編みにしたりツイントールにしたりして遊んでいた。

さらっさらで、一本一本から光があふれているような綺麗な髪は触るとひんやりしていて、いじるのがすごく楽しい。

「ソラリスは肌も白いし、髪も綺麗で顔も可愛いから、将来はきつとモテるね。」

ってソラリスに言ったら、嬉しそうに笑った。

その姿がもう可愛くて、思わずぎゅーっと抱きしめてしまった。

そんなことを3、40分くらいしていると、ジャックが起きてきた。うるさかったかな？と思ったら、ソラリスが「おにいちゃんはいつもこんな感じだよ。」と言ってきた。

え、いつもそんなちよっとしか寝てないの。

「え、あー…。でも、仮眠時間あるからね。」  
ジャックは微笑んでそう言った。

仮眠で。そんなちよっとしか寝てないんだなあ。

「でも夕方仕事に行く前とか、ちよくちよく寝てるんだよ。」  
そう言うジャックをみて、大変なんだな…としみじみ思った。

それから今度はジャックも混ぜて、私のいた世界の話を聞かせてあげた。

人魚姫の話では「え、そっちの世界に人魚いないの？」と驚かされて驚愕した。え、いるの?!

「姿はめつたに現さないけど、いるよ。僕の知り合いにも二人いるね。」  
ジャックがそんなことを言う。  
人魚の知り合い…。  
想像すればすさまじい話だ。

そこに。ノックの音が響く。

ジャックが立ち上がって玄関へ向かう。

玄関といってもキッチンと玄関の間には太い柱が一本あるだけで、ここからでも玄関の様子がうかがえる。

「はい？」

扉を開けたジャックは、客人を見て目を見開いた。

「ジル…様？」

ジル？

お客さんは、背の高い美青年だった。

銀の短髪に、透き通るような青い瞳。

纏っている空気が他の人と違う感じ。

後ろに可愛らしい少女と体格の良い男が立っているのが見える。

純白のさらさらした髪と、紫色の瞳をした少女。

真っ青な髪と瞳を持った、顎にひげを蓄えた男。

その三人。

ジルというのは、あの美青年のことだろう。

ジルはジャックに微笑みかけて、私に目を向けた。

「昨日、ルマーレに出っていた部下から、黒髪の勇敢な女性の話聞いてね。」

どうやらその方はジャック、君の妹であるソラリス殿と一緒にいらしたらしく。

それでこうして訪ねたわけだが、あの話は真実のようだね。」  
ジルの言葉に、ジャックは慌てて私に目を向ける。  
その顔には焦りが見えた。

私は立ち上がったって玄関へ向かう。

「…っ。」

ジャックは何か言おうとするが、言葉が見つからなかったらしく、  
下唇を噛んで押し黙った。

「えーっと。」

私はジルを正面にして、それから言葉を探す。

「ひとまず…どちらさまで？」

とりあえず何者なのか、それが知りたい。

ジルは微笑んで、軽く頭を下げる。

銀色の髪が、光に反射してきらきらと眩しい。

「失礼。わたしはセノルーン公国第二王子、ジル・D・ローレヴァ  
ンツと申す者です。」

彼はそう言って、顔をあげると私の手をとった。

王子…。

前に、ヴァシユカが言っていたことを思い出す。

黒目、黒髪。その私に、彼は何の用だろう。

「黒き御髪おみくしを携えた姫君がこちらにいらっしやると伺いましたの  
で、足を運ばせて頂いた所存です。」

丁寧にそう言って、片膝をつく。

「想像以上に美しいお方だ。是非ともお名前を伺ってもよろしいで  
しょうか？」

透き通るような青い瞳は、私を真っ直ぐに見詰めている。

この国には色男しかいないのではないかと疑ってしまっくらいに、  
彼も格好良い。

「あー、えっと。ごめん。名前聞き取れなかった。もう一回。」  
ジルは私の言葉にきょとんと目を丸くして、それからくすりと笑う。

背後からジャックの笑い声が微かに聞こえた。

「ジル、で良いですよ。して、貴殿のお名前は？」

「あ。七夕、です。」

私は名前をきちんと聞き取らなかった罪悪感を感じながら名乗る。

「ナユウ様ですか。」

「あつ、ナユでいいよ。」

私のことをナユウと呼ぶ人はほとんどいないし。

本当、なんなの。なゆーって…。

「でしたら、そのように御呼びしましょう。ナユ殿。」

ジルはそう言って艶やかに笑った。

その笑みが妙に色っぽくて、かつこいいなあ…と見惚れてしまった。

「ちっ…。」

気のせいか、どこかからか舌打ちが聞こえたような…。

私の肩に、手が置かれる。

背後に立っていたジャックが、私を支えるように肩に手を添えていた。

「んで、今日はどのようなご用件で？」

ジャックはジルを見下ろして、言う。

ジルは軽くジャックを人睨みすると、すつと立ち上がった。

「本日は、ナユ様を食事に誘いに来たのです。今晚、是非ご一緒してください。」

「お断りします。」

「君には訊いていないよ、ジャック。」



ジャックとジルはどちらも劣ることのない美しい笑みで話す。美青年二人に、何故か挟まれて会話されている私からすれば居心地がわるい。

「ジル殿下。ナユは今晚わたし共と夕食を共にする予定なのです。」

「そうか、それではキャンセルして頂こう。」  
「  
にっこりと微笑んではいるものの、険悪なムードは増していくばかり。」

何、この二人仲悪いの？

何だか長くなりそうだったので、

「じゃあ、三人で食べようか！」

なんて言うてみたら、ジャックの笑顔が引きつったのが分かった。

## 15 ジル（後書き）

今回は二話に分けることができず、大分長くなってしまいましたが、さらっと読んでもらって大丈夫です！

そして、新キャラを登場させてみました。

第二王子ジルくんです。よろしくやってください！

## 16 馬車と洋館

ソラリスを隣に住んでいるおばちゃんに預けて、私とジャックはジルの馬車に乗った。

馬車なんて乗ったのは初めてだ。

私はジャックに貰った新しい制服（ジャックなりに気を遣った結果が制服だった）を着て、ネクタイを気にしながらちらりと二人を盗み見る。

私の向かいに、珍しく機嫌の悪そうなジャックがいて、隣にはただ微笑んで黙っているジルがいる。

ジャックの隣にはさっきの白髪の女の子が静かにたたずんでいて、そこだけなんとなく違和感がある感じがした。

もう一人の付き添いっばい男は馬車を運転している。

まあそんな感じで。居心地が悪いのは相変わらず。

お父さんと兄貴が喧嘩した夜に似た緊張に似ている。

あれは本当に怖い。滅多に怒らない兄貴の機嫌悪い時ときたら……。いや……。閑話休題。

しかし馬車というのは思いのほか乗り心地が良くない。

想像以上に揺れる。

酔ったらどうしようね。

そんなことを考えながら、隣のジルを窺う。

ちらりと横目で見ただけなのに、

「何でしょう？」

一瞬で気付かれた。すごい。

「えっと…あの、あー…。髪、銀色なん…だね。」  
とりあえず訊いてみたけど、訊いて大丈夫系かな、この話。

私の心配をよそに、ジルはにっこりと微笑む。

「やはり目立ちますよね。これ。」

ジルは短い髪を撫でながら笑う。

「母がセノルーンとログダリアのハーフでして。ログダリアの血を濃く継いでしまったんですよ。」  
なるほど。

「綺麗だね、その色も。」

「ナユ殿の黒髪も美しいと思われませんが…。」

それは、珍しいからそう思うのだろう。

黒髪が、珍しいから。

私からすれば、青とか銀とかのほうがよっぽど珍しいのだけど。

さて、雑談もいいけれど。

そろそろ本題に入ろうかな。

「んで、ジル。」

私の言葉に、白い髪の少女がぴくりと目を細めた。

私は尊敬している人にしか「くん」も「さん」もつけないから。

王子だろうがそれは同じ。

そう睨まないでちょーだいな。

「なんででしょうか？」

ジルは少女を目でなだめながら応える。

「何しに来たの。」

私の言葉に、ジルは目を細める。

「ですから、ナユ殿を食事に招待しに…。」

「じゃなくて。」

私はジルの整った顔を見て。

「なんで夕飯を誘ってくれたのか。」

ジャックが少し真面目な顔になって私達の会話に意識を向けたのが分かった。

「それは先程も申しました通り、部下から黒髪の少女の話しを聞いたので。

失礼ですが、黒髪とはさぞ珍しい、と思ひましてね。是非会ってみたいと、この場をもうけたのですよ。」

ジルはにっこりと笑う。

銀の髪がさらさらと揺れて、流れる。

「それだけ?」

私の言葉に、ジルはふっ、と笑みを消した。

「...と、言いますと?」

明らかにわざと、オツシャッテルイミガワカリマセンという風にとぼけているジル。

まあいいか。

「いや。ないならいいよ。」

私は話を打ち切って、こつちをただひたすら睨んでいた少女に微笑みかけてみた。

少女は僅かに俯いて、無表情に正面を見詰める作業に戻った。

すごい可愛いんだけどなあ。

いつの間にかジャックはいつも通りのジャックに戻っていて、ジルも微笑みを湛えたまま普通に座っている。

「そういえばナユ、今日は途中で寝ちゃってごめんね。ヴァシユカが出て行ったのもわかんなかったよ。」

「謝ることじゃないよ。それと、ヴァシユカはあの後すぐ帰ったよ。」

「そういえばあの時ジャック寝顔かっこよかったなー、とか思い出し

ながら答える。

「ヴァシユカ…。」

ふと、ジルがヴァシユカの名前を零す。

「ヴァシユカ・アディゼウス公とお知り合いなんですか。」

「あでいぜうす?」

「ヴァシユカの家名というか…氏の姓だよ。」

ジャックが説明してくれる。

ふむ。名字か。

どうにも、ヴァシユカは有名人らしい。

「わたし個人の考えとしては、ヴァシユカ殿はもつと高い地位にいても良いと思うのですが…。彼はわたし共の誘いを毎回拒否しているのです。」

ジルは苦笑して言う。

へえ、そんなにすごいのか。

「彼は優秀な銃士ですよ。」

ジルはヴァシユカに憧れを抱いているのか、弾むような口調でいう。

ジャックも、自分のことのように誇らしげに笑っていた。

なんとなくそんな感じはしてたけど、ヴァシユカはすごいんだ。

「ジルは…剣士なの?」

ジルが腰に携えている真っ黒な剣を見て言う。

「え?あ…ええ。まあ、そんな感じでしょうかね。剣技はそれほど上手くないのですが。」

ジルは曖昧に答えて微笑む。

そういえば。

「ジャックも剣持ってるよね。」

この間図書館に行くとき、短剣を差していたのを思い出す。

ジャックはにっこり笑って。

「うん。一応オーダーメイドのやつなんだ。」  
へえ。オーダーメイドかあ…。

その言葉のあとにジャックがジルに向けた意味深な笑みが気になった。

それを見たジルは顔を若干赤くさせる。今の笑みには何の意味が…？

こほんこほんと咳払いをしてジャックを恨めしそうに睨むジル。  
なんか可愛い。

その態度の意味を知るのは、また別の話し。

長い間馬車に揺られ、やっと着いたと思っで降りてみると。

そこには大きな館があった。

すごいなーとしばらく見上げてから、ジルの案内で中へと入る。

西洋風の館は、テレビでよく見るそれと同じに、赤いじゅうたんが廊下にすーっとのびていた。

ここは、ローレヴァンツ家の別荘なのだそうだ。

「本日はわたしの個人的な誘いなので、こちらで申し訳ないです。」  
私からすれば、何が申し訳ないのか全然分からないのだけでも。

この洋館に家が何件入るか頭の中で考えていると、廊下の途中にある大きな扉の前でジルが立ち止まった。

後ろに控えてきた体格の良い男が、黙っでその扉を押し開ける。

その中は、恐らく食堂だろうと思われた。

漫画などでよく見るような。

なっがい机に、真っ白なテーブルクロスがかけられていて、ずらりと造花や蝋燭が列を作っている。

10人くらいのメイドさんたちが壁に張り付くように並んで立ち、私たちが入って来たのを見ると優雅に頭を下げ、挨拶をしてきた。ここまで完璧に「お金持ち」だと逆に緊張してしまう。

「こちらが食堂です。」

ジルはそう言って、微笑む。

私が言葉もでないまま硬直していると、

「…しかし、まだ夕食には早いですね。時間潰しと言ってはなんですが、屋敷の中をご案内致しましょうか？」

そう言って、メイドに下がるように命をだす。

メイドは姿勢よくお辞儀をすると、右側にあつたもう一つの扉の方から出て行った。

それから、背後で控えている大男にも下がるように言って、私に微笑みかけた。

「それでは、わたしにお付き合い願えますか？」

私に気を遣ってくれたのがよく分かって、私はジルの優しさを垣間見た。

ジャックと少女が同時に目を細めるのを横目で見ながら、私はジルの誘いに応える。

こういうのを王子さまっていうんだな、とジルの王子らしさを一人でしみじみと感じていた。



## 17 成年と未成年（前書き）

あけましておめでと〜ございませす！

この作品をここまで読んで下さった方、本当にありがとうございます！  
す！

長期連載の予定ですので、これからもよろしくお願ひします！

ぐだることも多いと思ひますが、今年もよろしくお願ひします。

## 17 成年と未成年

館の中はすぐく広くて、回るのだけで結構時間がかかった。それでも、見ているだけで面白いものだ。

暖炉のある部屋や、屋根裏部屋、図書館みたいな書庫に、グラウンドピアノが置かれたホール。

どれもこれもびっくりするくらいのスケールで、思わず大きなふかふかベツトとかで飛び跳ねてしまった。

ジャックは私の隣を歩きながら、常に辺りを慎重に警戒していた。自分では周りに気付かれないようにしているようだけど、ぴりぴりとした緊張がダイレクトに伝わってくるので、まるで意味ないことのように思われる。

まあ、警戒する気持ちもよく分かるけど。

同じく白い少女も私とジャックに注意をはらい続けていた。素人の私でも分かるくらい、立ち姿に、歩き姿に隙が無い。こんなに小さいのに王子の側近をしているというのも頷けた。

「そっういえば、名前は？」

私は会ってから一言も声を発していない少女に訊いてみる。

少女は私にまっすぐ視線を返してくれるものの、質問には答えない。「彼女は、デコットといいます。こう見えて優秀でしてね。わたしの従者の中では1、2を争うほどの実力の持ち主ですよ。」

ジルが、答えない少女の代わりに私の質問に返答した。

少女　デコットはいかにも形だけ、といった風に軽いお辞儀をした。

これほど美しい少女が、無表情でいるというのは勿体ない気がする。

笑顔が見てみたいものだ。きっと映えるに違いないのに。

艶やかに、艶やかな純白の髪。

白の。

白　　天使。

生きた殺戮兵器。

ヴァシユカの言葉が思い出された。

一目見た時から、疑問に思っていた。

青の国セノルーンの間人であるジャックやソラリスたちの青い髪。

銀の国ログダリアの血を受け継いだジルの銀の髪。

それぞれ髪の色、もしくはは目の色にその国の特徴が出ていた。

それではデコットは？

紫の瞳に白の髪。

紫。

白。

白の国。ライトフェザー。

天使の国。

まさかとは思うが、デコットは。

しかし、今は訊くべきときではない気がする。

私はデコットに軽く笑いかけて、視線を外す。

そこで、ジルが手を叩いた。

「大体見て回りましたね。どうでしたか、ナユ殿。」

「うん。楽しかったよ、ありがとう。」

私は廊下をジルの後に進み、壁に掛けられた絵画等を眺めながら答える。

「ではそろそろ、食事に致しましょうか。」

ジルはにっこりと微笑んで、背後のデコットに厨房への伝言を頼む。

デコットはこくりと頷いて、音も立てずに走り去って行った。

それから私たちは、最初に入った食堂までやってきた。長い机の端に、私とジルが向き合うようにして座る。

そして、私の隣にジャックが腰掛ける。

メイドさんたちや、従者の男とデコットは壁に沿って立ったまま。長机を使っているのは私たち三人だけ。

なんだかもつたいない気さえしてくる。

ナプキンをかけて、机の上に目を向ける。目の前に置かれたいくつかのナイフやフォーク、スプーンが不安を誘った。

私の家は普通の家庭だったので、マナーなんぞ分らないのだが、そんな私の緊張を察したのか、

「ナユ、あんまり深く考えなくていいんだよ。」

ジャックがそう言っつて、食器の使い方を軽く教えてくれる。ありがたい。

「ナユ殿、ワインはお飲みになれますか？」

いきなり、ジルがそんなことを言ってきた。

ジルの背後には、ワインの瓶を大切そうに抱えた執事っぽい人がいつの間にも控えている。

勿論、ワインなんて飲んだことがない。

「未成年だから…、飲まない。」

ワインなんて未知の世界すぎる。

飲んでみたい気持ちもないのではないのだけど…、昔お母さんに「ワインを飲むのは働いて一円の重さを知ってからよ！」って言われたからなあ。

ジルは、そうですかと頷いて、私の隣のジャックに微笑みかける。

「ジャック、君は飲みますね？」

ジャックも未成年なのでは？

「いや…この国は16から成人なんだよ。」

へえ、じゃあ私もこの国では未成年じゃないんだ。

私の疑問に答えながら、渋い顔をするジャック。

視線はジルの指し示すワインに。

引きつった笑みを浮かべて、明らかにワインに苦手意識があることがうかがえる。

うちのお父さんもワインが苦手な人だったので、何もおかしくはないと思うのだけれど。

「あれ。お酒は飲めないんですっけ？」

ジルの微笑みに、ジャックは引きつった笑いを返す。

「い、いいええ、大丈夫ですよ。いただきます。」

ジャックの返事にジルは満足したように笑うと、執事らしき人にジャックにワインをささげるように言う。

グラスに注がれていくワインを苦々しい表情で見るジャック。

そんなに嫌なら断ればいいのに？

私のグラスにはオレンジジュースが注がれ、それを見たジルが自分のワインの入ったグラスを掲げる。

私とジャックもそれに続き、礼と共に一口飲んだ。

普通のオレンジジュースだけれど、なかなか美味しい。  
濃くて。

グラスを置いて、目の前に置かれた高級料理にわくわくしながらジャックをみると。

グラスを持ったまま机に突っ伏していた。

「え、えええ！？」

私は驚いてジャックの肩を揺するも、反応は返ってこない。

「あははは。」

ジルがおかしそうに笑う。

「え、なんか入れた？」

私の問いに、ジルはくつくつと笑いながら首を横に振る。

「いや…、ジャックは昔からお酒に弱いんですよ。一口でも飲むとそうなります。ちょっとしたいたずらのつもりだったんですがね。」  
手をひらひらと振って、悪気が無かったことを主張する。

「いや、絶対嘘でしょ…。」

「あはは、流石に分かります？」

ジルはにこ、と深みのある笑みを浮かべる。

ワインのグラスをくるくると回して、もう一度口に含む。

「セノルーンでは、お酒が飲めることは大人の証なんです。ジャックはもう成人しているのですね、お酒が飲めないことは彼にとって恥ずべきことなのでしょう。」

「それで、ジャックが飲んでこうなるってわかってて勧めたんだね。」

「はい。すみません。」

ジルは素直に認めて、ワインのグラスを置く。

何のために。

…それはもう、分かりきっている。

「ナユ殿と二人で話すために、ですね。そう構えなくても良いですから。」

ジルはそう言ってくすりと笑った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8492x/>

---

黒の少女と観戦日記

2012年1月4日11時46分発行